小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII

矢田新遺跡
五郎座貝塚
松谷廃寺跡

2018.3
石川県小松市埋蔵文化財センター

例　言

1.　本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2.　試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3.　対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【 矢田新遺跡 】（平成 25 年度）
[調 査 地]　石川県小松市矢田町
[調査原因]　個人住宅
[試掘調査]　2013. 3. 25
[試掘担当]　岩本信一
[調査面積]　63m^2
[発掘調査]　2013. 7. 9 ～ 2013. 7.26
[調査担当]　横幕 真
[試掘調査]　2013. 7.23 ～ 2013. 7.24
[試掘担当]　岩本信一
[調査面積]　65m^2
[発掘調査]　2013.10.17 ～ 2013.10.30
[調査担当]　下濱貴子

【 五郎座貝塚 】（平成 25 年度）
[調 査 地]　石川県小松市今江町
[調査原因]　個人住宅
[試掘調査]　2013. 3.18 ／ 2013. 4.18
[試掘担当]　岩本信一、宮田 明
[調査面積]　58m^2
[調査期間]　2013. 5.23 ～ 2013. 6.18
[調査担当]　宮田 明

【 松谷廃寺跡】（平成 22 ～ 24 年度）
[調 査 地]　石川県小松市五国寺町
[調査原因]　重要遺跡詳細分布調査
[調査面積]　約 4,000m^2
[調査期間]　2010. 5. 8 ～ 2010. 7. 5
2011. 8. 3 ～ 2011.11.28
2012. 7.23 ～ 2012.10.11
[調査担当]　川畑謙二

4.　発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5.　出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 29 年度に実施した。
6.　遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、各執筆担当者が行った。
7.　本書の編集は宮田が担当し、各執筆担当者を目次に示した。
8.　発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会で一括保管している。

凡　例

1.　本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高（T.P.）で表示し、世界測地系に準拠している。五郎座貝塚は「測地成果 2011」、ほかは「測地成果 2000」に準拠している。
2.　本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3.　本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4.　本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録の時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目　次

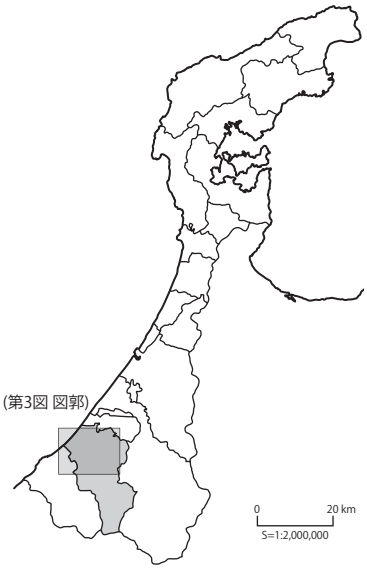
I　位置と環境 ……（宮田）…… 1
II　矢田新遺跡発掘調査 ……（横幕）…… 13
III　五郎座貝塚発掘調査 ……（宮田）…… 27
IV　松谷廃寺跡確認調査 ……（宮田）…… 39
報告書抄録 …… 48
写真図版 1 ～ 8

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

１　市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km^2 を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣７町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後２次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

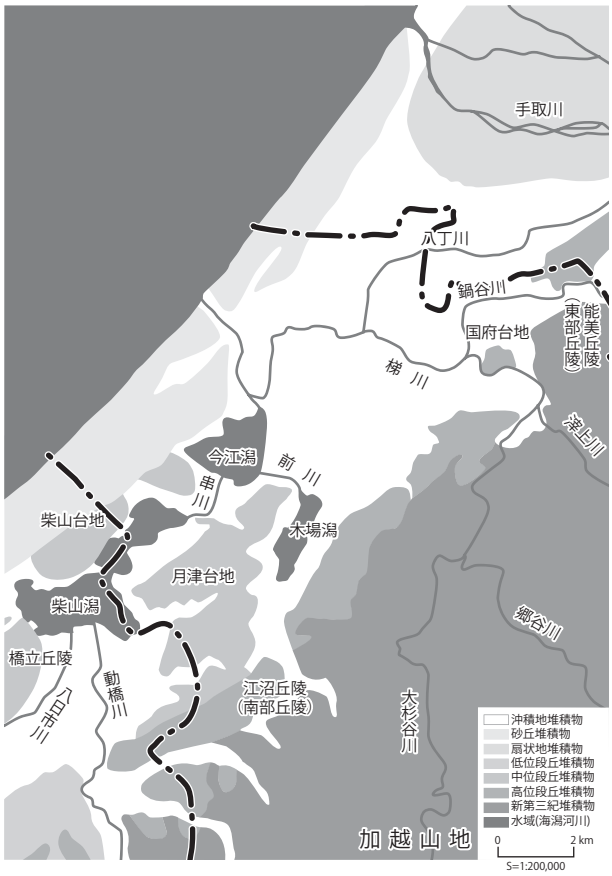


第1図　小松市の位置

２　加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には５～ 10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地､南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約３分の２が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

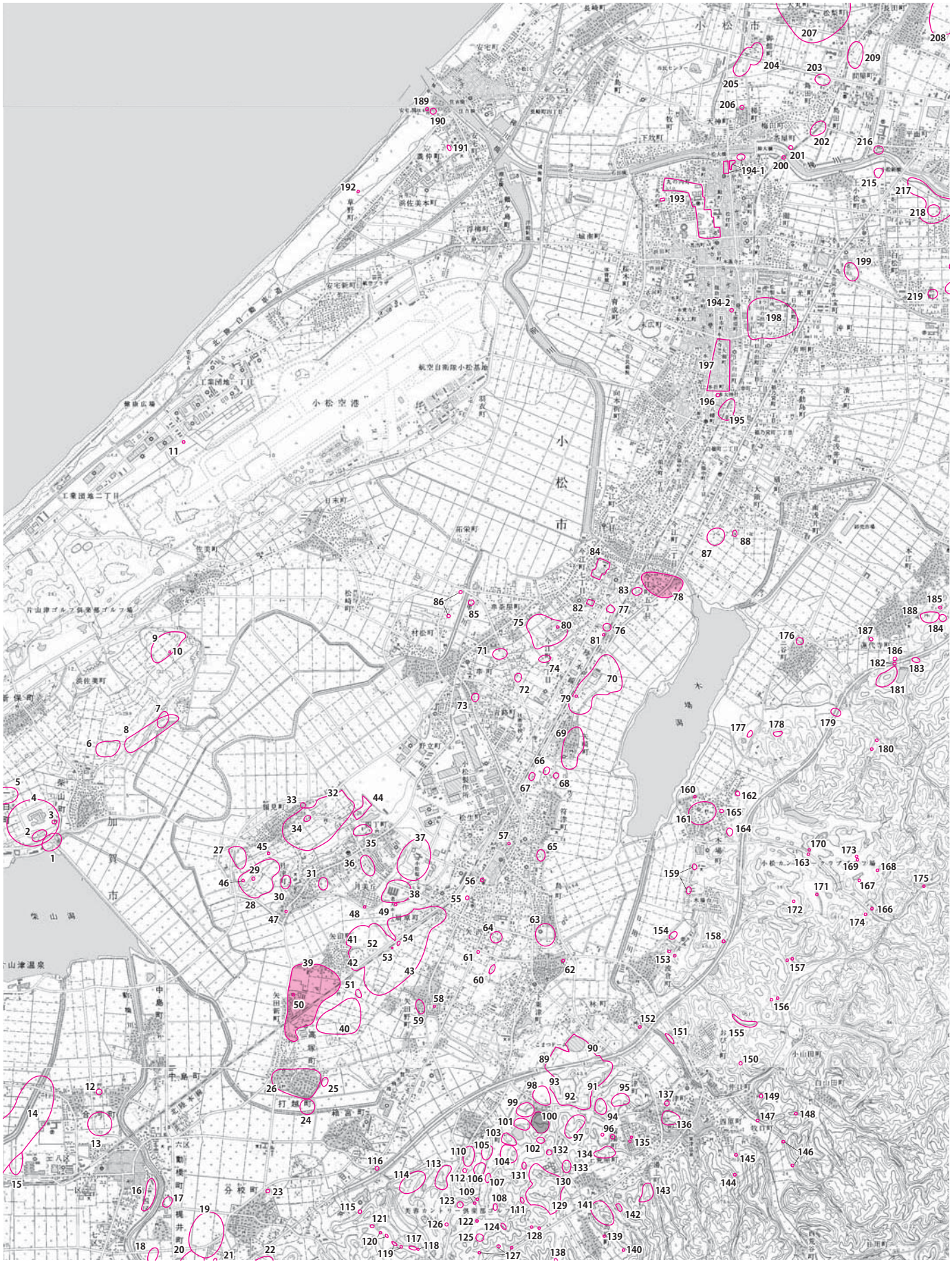
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図２は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。



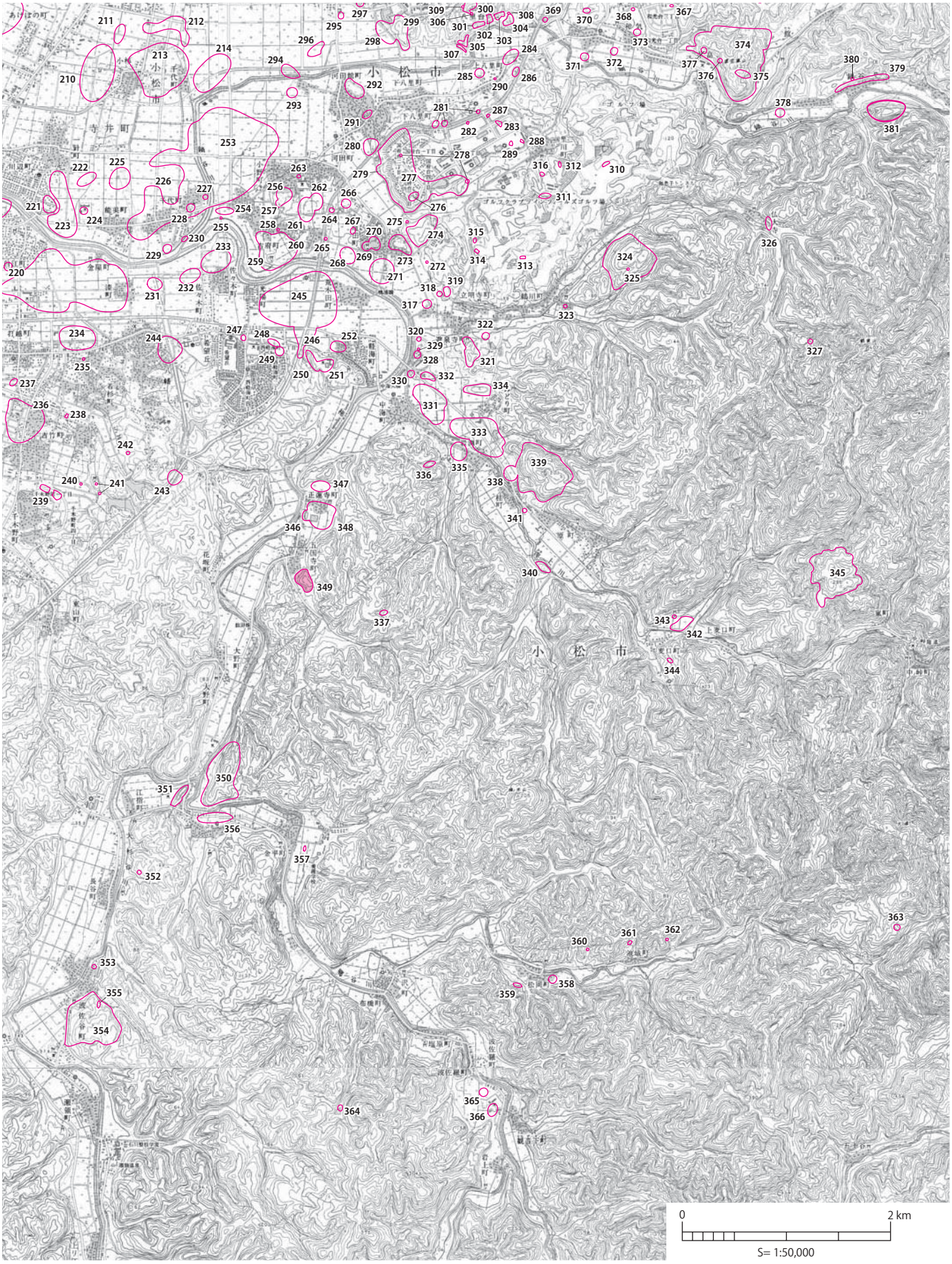
第 2図　小松市の地形

３　梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



第３図　遺跡分布図


小松市
小千松市
寺井町
0
2 km
S= 1:50,000

れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第 2 節　歴史的環境

1　旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A ～ F 遺跡（300 ～ 305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A ～ D 遺跡や宮竹うっしょやま A･B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2　弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂（たかんどう）遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3　古　墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では臼のほぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4　古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6 世紀以降 8 世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7 世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7 世紀代の月津台地では、額見町遺跡（32）の発掘調査以降、矢田野遺跡（43）、薬師遺跡（70）でＬ字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8 世紀、在郷の財（たから）氏関連遺跡とされる佐々木遺跡（231）が異彩を放つほかは、概ね盛期が 9 世紀後半～ 10 世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図 3 には中宮八院（319、322、331、338、347、348、349、352）を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺（きよみずでら）跡（243）、八里向山 B 遺跡（301）、里川 E 遺跡（314）が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡（349）では、8 世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6 世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（105）で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群（100）、二ツ梨殿様池古窯跡群（101）で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10 世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7 世紀前半に八里向山 J 遺跡（地蔵谷古窯跡：309）で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群（図郭外）に操業の拠点を移動する。8 世紀前半には和気古窯跡群（図郭外）へさらに移動し、9 世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯 1 基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡（183）で製鉄に伴うと見られる製炭窯が 7 世紀後半～末ないし 8 世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡（いずれも図郭外）が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡（218）、漆町遺跡（220）は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡（218）は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡（漆町遺跡：220）周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5　中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡（339）、岩倉城跡（345）、波佐谷城跡（354）など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12 世紀末までには二ツ梨奥谷 1 号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に 14 世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6　近世～現代

1640（寛永 17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では 19 世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百（どびゃく）古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿（さもんど）古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第 1 表　遺跡地名表

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡 A 地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A 地点）	集落跡	弥生	
	柴山出村遺跡（B 地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日末経塚	経塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	動橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猫橋遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	動橋堡跡	堡塁跡	中世（室町）	
17	梶井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	梶井遺跡	散布地	古代	
19	分校 A 遺跡	散布地	古墳	
20	分校 B 遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳 2
22	分校カン山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 3、円墳 10、方墳 6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越 A 遺跡	散布地	縄文	
25	打越 B 遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山 A 遺跡	散布地	不詳	
	茶臼山 B 遺跡	散布地	縄文	
29	茶臼山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津 A 遺跡	散布地	古代（奈良）	
32	額見町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
33	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
34	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	**矢田新遺跡**	**集落跡**	**古代（奈良）**	
40	刀何理遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
41	矢田 A 遺跡	散布地	縄文	
42	矢田 B 遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	臼のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、２段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室、家形石棺
51	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	蓑輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
60	下粟津 A 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 7 ～ 8
61	島経塚	経塚	不詳	
62	下粟津 B 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2
63	島遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	島 B 遺跡	散布地	古代	
65	島 C 遺跡	散布地	古墳	方墳？
66	符津 A 遺跡	散布地	縄文	
67	符津 B 遺跡	散布地	縄文	
68	符津 C 遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	薬師遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カンノヤマ A 遺跡	散布地	古代（奈良）	
72	串カンノヤマ B 遺跡	散布地	古墳	
73	串カンノヤマ C 遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	**五郎座貝塚**	**貝塚**	**縄文**	
79	矢崎 B 古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴 4
84	御幸塚城跡	城館跡	中世	主郭と曲輪の一部
85	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	浅井畷古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡（林タカヤマ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯 3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林オオカミダニ古窯跡群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯 2、土師器坑 1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林製鉄跡）	生産遺跡	古代	製鉄炉 2、製炭窯 4、鍛冶炉 2、鋳型坑 2
91	戸津 5・12 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯 2、南加賀古窯跡北群
	戸津シンブザワ製鉄跡	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉 4、製炭窯 3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世（鎌倉）	須恵器窯 36（瓦陶兼窯 5）、土師器坑 19、製炭窯 2、加賀窯 1、南加賀古窯跡北群
93	戸津六字ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 7、製炭窯 1、南加賀古窯跡北群
94	戸津 1 号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯
	戸津ワクダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯 1
95	戸津ショウガダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯 1、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
96	戸津 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
	戸津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯 2、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯 12、土師器坑 28、製鉄炉 1、製炭窯 2、南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨豆岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須恵器窯 4
100	二ツ梨豆岡向山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵器窯 12（埴陶兼窯 2、瓦陶兼窯 2）、南加賀古窯跡北群
101	二ツ梨殿様池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（平安）	須恵器窯（埴陶器兼窯）3、土師器坑 3、南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨グミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑 4、須恵器窯、南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 3、南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨峠山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 8、南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 5、南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨脇釜遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯 1、製鉄 1、製炭窯 1、南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯 1、製鉄 1、南加賀古窯跡北群

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
108	二ツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代（平安末）	須恵器窯 2、加賀窯 1、南加賀古窯跡北群
109	二ツ梨奥谷 1 ～ 2 号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
110	二ツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯 6（瓦陶兼窯 1）、南加賀古窯跡北群
111	二ツ梨カセイデ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須恵器窯 2、南加賀古窯跡北群
112	矢田野向山古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯 6、南加賀古窯跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯 4、加賀窯 2、製鉄 3、南加賀古窯跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯 6、加賀窯 2、南加賀古窯跡北群
115	箱宮 A 遺跡	散布地	中世	
116	箱宮 B 遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷 1 ～ 2 号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯 2
118	小天王谷 1 号製鉄跡（天王山 1 号製鉄跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷 2 ～ 3 号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
120	大久保谷 1 ～ 2 号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷 1 号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯
123	矢田野カナクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 3
124	矢田野 1 ～ 2 号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷 1 ～ 5 号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷 6 号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 3
128	上荒屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯 4、製鉄 3、南加賀古窯跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯 4 ～ 5、製鉄 2、横穴 1、地下式坑 1、南加賀古窯跡北群
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（奈良）	須恵器窯 4、南加賀古窯跡北群
132	上荒屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯 2、南加賀古窯跡北群
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯 1、加賀窯 1、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
134	上荒屋オジマヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯 4、製鉄炉 1
135	戸津 1 ～ 2 号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世（室町）	
137	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋那谷口遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯 1、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1
141	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墳墓	古代（平安）～中世	須恵器窯 5、製鉄炉 2、墳墓、南加賀古窯跡北群
142	上荒屋ハカンタニ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯 2
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯 10、製鉄炉 2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカナクソ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
146	牧口キドラ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄 2
147	牧口中世墓跡	墳墓	中世（鎌倉）	牧姫塚比定地
148	白山田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	井口神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	井口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	井口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世（鎌倉）	
153	津波倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世（室町末）	地下式坑 6、2 基調査
154	大谷山貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
156	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
157	小山田オクサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯複数
159	木場古墳群	古墳	古墳	円墳 4
160	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
161	池田城跡	城館跡	不詳	
162	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
163	木場 A 遺跡（木場遺跡 H 地区）	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄炉 1、製炭窯 2
164	木場 B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
165	木場 C 遺跡	散布地	弥生	
166	木場遺跡 A 地区 (1 号遺跡)	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯 3、鉱滓散布地
167	木場遺跡 B 地区 (2 号遺跡)	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉 2、製炭窯 2
168	木場遺跡 C 地区 (3 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡 D 地区 (4 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯 1
170	木場遺跡 E 地区 (5 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡 F 地区 (6 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡 G 地区 (7 号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場遺跡 D 地区 (8 号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴 1
174	大曲遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
175	長谷醤油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
176	三谷遺跡	散布地	縄文	
177	三谷 B 遺跡	散布地	弥生～古墳	
178	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、鉱滓散布地
181	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
182	蓮代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	製鉄炉 1、製炭窯 1
183	蓮代寺ガッショウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯 3、鉱滓散布地
184	蓮代寺 A 遺跡	散布地	不詳	鉱滓散布地
185	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
186	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
189	安宅関跡	その他	不詳	県指定史跡
190	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
191	安宅中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の葺石とも、現存せず
193	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・泥町の町屋跡

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
194-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	幸町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	埋納銭出土地
197	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
198	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
200	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
201	梯川鉄橋 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
202	島田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
203	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
204	御館遺跡	城館跡	中世（室町）	
205	銭畑遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蛭川新七郎重親居館伝承地
206	梯遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
207	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
210	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
212	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代（平安）	
213	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
216	平面梯川 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
217	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	白江堡跡	城館跡	中世（室町）	白江新助景盛居館伝承
219	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
220	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地坊跡	社寺跡	中世（室町）	
225	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	千代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城館跡	中世（室町）	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡（奈良）
232	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサバタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	吉竹 B 遺跡 (吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	旧河道の堰跡
238	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千木野遺跡	散布地	縄文	
	千木野 (A) 遺跡	古墳	古墳	方墳 8
	千木野 (B) 遺跡	集落跡	古墳	
240	幡生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積横穴式石室
242	若杉オソボ山 1 号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（奈良）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳 8、木芯粘土室
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡 6 号墳を削平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大谷口遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓 9
251	軽海廃寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西芳寺伝承地
253	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古府遺跡	集落跡	古代（平安）	
255	古府フドンド遺跡	散布地	古代（平安）	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
258	古府横穴	不詳	不詳	
259	古府シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
262	小野スギノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
263	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が荼毘に付された地とされる
265	埴田の虫塚	その他	近世末	害虫の菩提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
266	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
267	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
268	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	埴田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
271	埴田遺跡	散布地	古代	
272	埴田塚	不詳	不詳	
273	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木棺直葬、木芯粘土室
274	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
275	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山 10 ～ 12 号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓、河田山 1 号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木棺直葬、木芯粘土室、切石積横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山 54 号墳の南に開口
278	河田山 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群、河田山 60 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
279	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
280	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3 地点で計 8 基
282	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴 11 基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
285	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
286	上八里 B 遺跡	散布地	古代（奈良）	
287	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
288	上八里 D 遺跡	散布地	古代（奈良）	
289	上八里 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
290	上八里 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窖窯、能美古窯跡南群　八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地割遺跡	散布地	不詳	
294	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
295	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	狭野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
298	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
299	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
300	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
302	八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳 1、木棺直葬
303	八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳 2、木棺直葬
304	八里向山 E 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳 1
		集落跡	古代	
305	八里向山 F 遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳 10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世（室町）	集石墓 1、横穴 3
306	八里向山 G 遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
307	八里向山 H 遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石墓群、96 基調査
308	八里向山 I 遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・泉台支群
309	八里向山 J 遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯、能美古窯跡南群　八里・泉台支群
310	里川 A 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯 2、製炭坑約 20
311	里川 B 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川 C 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川 D 遺跡	散布地	縄文	
314	里川 E 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
315	里川 F 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
316	里川 G 遺跡	散布地	不詳	
317	遊泉寺・クボタ A 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
318	遊泉寺・クボタ B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	社寺（隆明寺）又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯（瓦陶兼窯）
319	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
	隆明寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
320	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	宮の奥墳墓群	その他の墓	（平安）	墳墓 4、3 基調査、2 号墓は鎌倉時代に経塚に利用された？
322	涌泉寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、複数ある伝承地の一
323	常徳寺跡	社寺跡	中世（室町）	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
324	鵜川堡跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の詰城伝承地
325	鵜川横穴	不詳	不詳	地下式坑？
326	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
327	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
328	仏生寺跡	社寺跡	中世	
329	仏生寺塚	経塚	中世	
330	ブッショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳 2、木芯粘土室
331	中海 B 遺跡	集落跡	古墳～中世	
	（伝）長寛寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院、地名伝承のみ
332	中海 C 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
333	中海遺跡・岩渕遺跡	散布地	縄文	
	岩渕上野遺跡	散布地	旧石器	

No	名　　称	種　　別	時　　代	備　　考
334	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明、5 基開口とされる
337	赤穂谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 9、地下式坑 4
338	善興寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
339	岩渕城跡	城館跡	中世	
340	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	仏御前屋敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代（平安）	小松市指定史跡
342	麦口遺跡	散布地	縄文	
343	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
344	下麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
345	岩倉城跡	城館跡	中世（室町）	
346	椎の木山遺跡	散布地	縄文	
347	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	護国寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
349	**松谷廃寺**	**社寺跡**	**古代（奈良）**	**8 世紀前半に遡る古代山林寺院**
	松谷寺跡	**社寺跡**	**不詳**	**中宮八院**
350	平野堡跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・平野某詰城伝承地
351	江指城跡（山神山砦跡）	城館跡	中世（室町）	
352	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
353	波佐谷遺跡	散布地	中世（室町）	
354	波佐谷城跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・宇津呂丹波守詰城伝承地
	（伝）波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 13、地下式坑 5
356	六橋遺跡	集落跡	縄文	
357	麻畠尾谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
359	火灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
360	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
361	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
362	池城経塚	経塚	中世（室町）	
363	曽山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ腰遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	観音下城跡	城館跡	不詳	
367	和気後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑、能美古窯跡南群　後山谷支群
368	和気後山谷 2 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群　後山谷支群
369	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯、能美古窯跡南群
370	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和気矢口 A 遺跡	散布地	縄文	
372	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
373	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群　後山谷支群
374	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
375	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺畠古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
377	寺畠薬師坂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	

参考文献

イ　石川県教育委員会 (1992) 石川県遺跡地図

石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡 I , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡 II , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群 I , 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡 I , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 III , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡 IV , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡 II , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 蓮代寺地区遺跡 I , 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群 I , 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1995) 石川県小松市荒木田遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群 II , 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群 III , 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 IV , 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群 V , 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡 , 石川県能美市
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
ウ　上野 與一 (1965) 考古篇 , 小松市史 4. 風土・民俗篇 , 小松市教育委員会 , 石川県
カ　軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌 , 小松東部土地改良区 , p75-77. p201-221., 石川県
コ　小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1990) 二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳 , 石川県
小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I , 石川県
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群 , 石川県
小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I . 二ツ梨豆岡向山窯跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II . 矢田借屋古墳群 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I , 石川県
小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III . 薬師遺跡 , 石川県
小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II , 石川県
小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III , 石川県
小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV , 石川県
小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V , 石川県
小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII . 矢崎宮の下遺跡 . 薬師遺跡 V 次 , 石川県
小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡 , 石川県
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦 , 小松市 , 石川県
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園 , 小松市 , 石川県
タ　辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡 , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II , 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群 , 石川県能美市
テ　寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群 , 石川県能美市
ヘ　日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌 , 能美郡役所 , p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343. , 石川県
日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌 , 江沼郡役所 , p679. , 石川県
ホ　北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸 , 桂書房 , p193-208.

第Ⅱ章　矢田新遺跡発掘調査

第１節　調査の概要

今報告は、平成 25 年度に小松市矢田町地内（矢田新遺跡）で計画された個人の宅地造成工事に伴う２件の発掘調査報告である。

１　調査に至る経緯

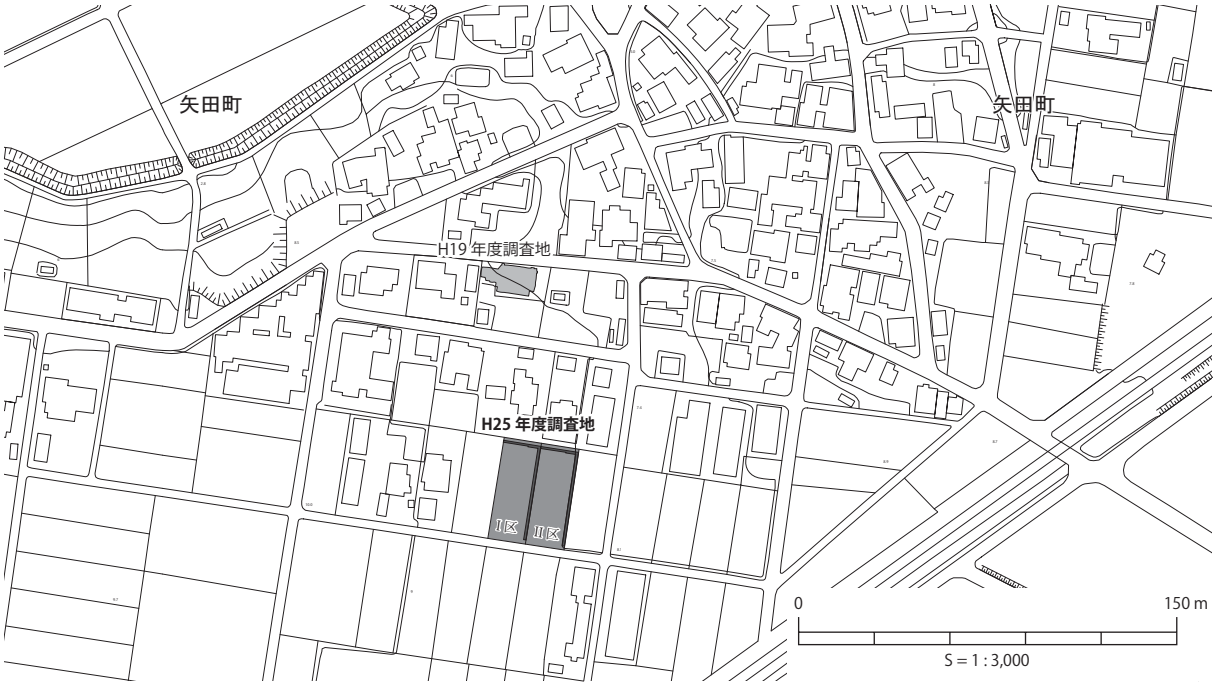
（1）H25 調査Ⅰ区

平成 25 年３月 13 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは３月 18 日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査を３月 25 日に実施した。試掘坑から遺構と遺物を確認し、翌 26 日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。協議の結果、擁壁工事範囲 63m^2 において発掘調査による記録保存が必要である旨を回答し、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届の提出を受け、７月１日付けで発掘調査が依頼された。併せて協定書を交換し、発掘調査に着手した。

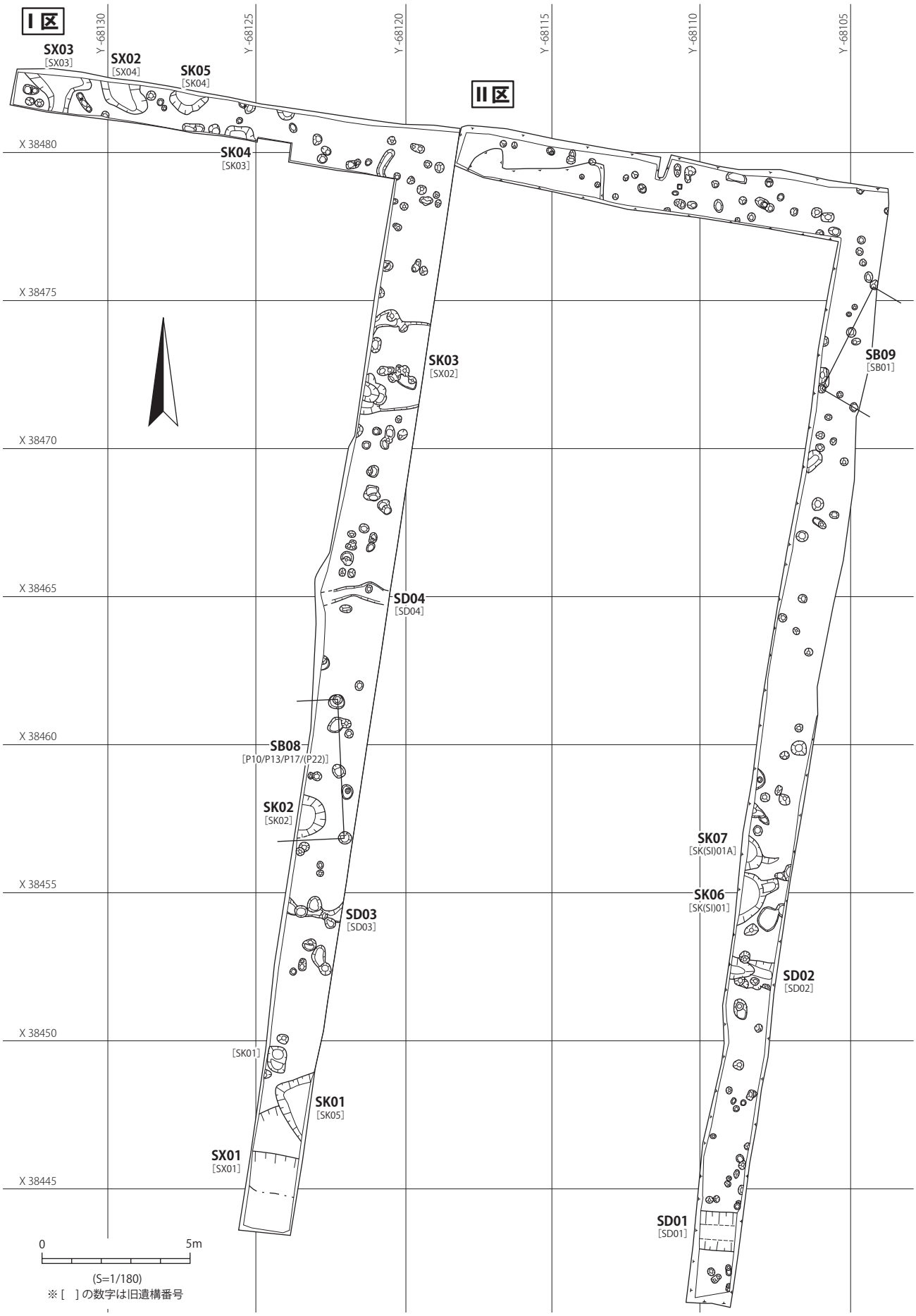
なお、住宅工事範囲については柱状地盤改良工事が計画され、建物面積における改良範囲の平面積等を検討した結果、埋蔵文化財への影響が軽微であるとの判断に至り、工事立会での対応とした。

（2）H25 調査Ⅱ区

平成 25 年７月 12 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査は７月 23 日～ 24 日に実施した。試掘坑から遺構と遺物を確認し、８月１日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。協議の結果、擁壁工事範囲 65m^2 において発掘調査による記録保存が必要である旨を回答し、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届の提出を受け、10 月１日付けで発掘調査が依頼された。併せて協定書を交換し、発掘調査に着手した。



第４図　矢田新遺跡　調査地位置図



第 5 図　矢田新遺跡　平面図

なお、住宅工事範囲については柱状地盤改良工事が計画され、建物面積における改良範囲の平面積等を検討した結果、埋蔵文化財への影響が軽微であるとの判断に至り、工事立会での対応とした。また、住宅新築に伴う付帯工事の内、浄化槽設置工事の掘削範囲についても埋蔵文化財に影響を与えるものと判断されたが、狭小範囲であったため工事立会による対応とした。

2　既往の調査

遺跡は昭和 45 年に発見され、同年発掘調査された。正確な調査地は不明だが、矢田新町付近で、古代Ⅲ～Ⅳ$_1$期の遺構や遺物が検出されている（市博 1971）。

平成 19 年には個人住宅を原因とする発掘調査が行われた。掘立柱建物 7 棟・土坑 8 基・溝 8 条・被熱面 2 面が検出され、TK10 形式～古代Ⅵ$_1$期の遺物が出土している（市教委 2011）。

3　調査の方法

調査は隣地境界杭を原点として、グリッド設定や区割り等を行った。平面図及びセクションポイントは、4 級基準点測量及び 3 級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標を用いて、必要に応じて 50 分の 1、40 分の 1、20 分の 1 に図化した。

4　調査の経過

（1）H25 調査Ⅰ区

7 月 9 日、重機で表土除去を開始し、順次、人力掘削を進めた。7 月 11 日より遺構精査を行い、7 月 12 日と 13 日に遺構検出状況の写真を撮影した。7 月 16 日、遺構の掘削を開始し、必要に応じて写真撮影及びセクション図作成を行った。7 月 18 日、併行して平面図作成を開始。7 月 26 日、全ての作業が完了した。

（2）H25 調査Ⅱ区

10 月 17 日､重機で表土除去を開始し､10 月 18 日より人力掘削と遺構精査を進めた。10 月 21 日、遺構掘削を開始し、必要に応じて写真撮影及びセクション図作成を行った。10 月 28 日、平面図作成を開始。10 月 30 日、全ての作業が完了した。

第 2 節　発見された遺構

以下、検出された遺構について述べる。遺構番号の記述は、建物に限り平成 19 年度調査からの通し番号を用いた。また溝や土坑等も整理する中で新しい番号を割り振った。そのため、齟齬のないように現場で付した番号も［　］内に併記した。

1　掘立柱建物（第 6 図）

SB08［Ⅰ区 P10 ／ P13 ／ P17 ／（P22)］

検出できた範囲が狭く、桁梁が判別できない柱建ち建物。少なくとも規模は 2 間× 1 間以上で、柱間は P10 － P13 間、及び P13 － P17 間でほぼ同じ約 2.3m となる。P10 で柱痕跡や硬化面が明瞭であったほか、P13 と P17 で硬化面を確認した。P22 でも硬化面を確認したが、柱配列からややずれる。主軸方位は不明だが、平成 19 年度調査区で検出された掘立柱建物 7 棟のうち 5 棟が桁行で東に振れるため、同様の主軸をもつ可能性がある。SK02 は位置関係から付属施設であるかもしれない。遺物は、P13 から須恵器甕片 1 点が出土した。

SB09［Ⅱ区 SB01　P1 ／ P2 ／ P3 ／ P4］

SB08 同様、検出できた範囲が狭く、桁梁が判別できない柱建ち建物。少なくとも規模は 2 間× 2 間以上で、柱間は 1.3 ～ 2.1m とバラつく。ほぼ全ての柱穴で硬化面を確認した。主軸方位は SB08 の項を参照すれば、桁行が東西に向く。遺物は、P1 ～ P3 でわずかに土師器片･須恵器片が出土した。

2　不明遺構（第７図）

SX01［Ⅰ区 SX01］

Ⅰ区南端で現地表面から2m以上の落ち込みを検出した。1～3層は明らかに新しい整地層であるが、下層は後述する SD01 と同一遺構の可能性もあるため、単なる撹乱ではないと判断した。遺物は多量の土師器片・須恵器片・鍛冶関連遺物・鉄製品とともに、近世陶磁器片や赤瓦片が混在することからも、下層の遺構が人為的に埋め戻されたと考えられる。図化遺物は No.3・15・17・34・40・41。

SX02・SX03［Ⅰ区 SX04・SX03］

図示していないが、下底面が被熱して覆土に焼土や炭化物、焼骨片を含む。出土遺物は細片が多く、上面近くで出土する傾向にあった。図化遺物は No.2・9。

3　溝（第７図）

SD01［Ⅱ区 SD01］

Ⅱ区南端付近で検出された、幅が地山検出面で約 1.3m、深さが地山検出面から約 88cm、断面 U 字形を呈する溝。遺物は出土していない。位置関係から SX01 と接続する可能性がある。

SD02［Ⅱ区 SD02］

幅が地山検出面で約72cm、深さが地山検出面から約52cmの溝。遺物は少量の土師器片が出土した。

SD03・SD04［Ⅰ区 SD03・SD04］

遺物を多く含むが、覆土は砂質の客土層のため、後世の整地に伴うものと判断した。図化遺物は No.4・20。

4　土坑（第８・９図）

SK01［Ⅰ区 SK05］

部分的な検出のため判断できなかったが、角の張る平面形でしっかりとした掘り方と平坦な下底面をもつことから、竪穴建物であるかもしれない。深さは地山検出面から約 32cm。上面は SX01 に切られている。遺物は土師器・須恵器の細片が出土した。

SK02［Ⅰ区 SK02］

平面形は円形もしくは楕円形と推測され、深さは地山検出面から約 20cm。遺物は土師器片・須恵器片・鍛冶滓が出土した。図化遺物は No.5・８・16 で、これらは概ね８世紀代に収まる。

SK03［Ⅰ区 SX02］

南北 3.0 ～ 3.3m、東西 1.9m 以上の浅い掘り方と、その中央寄りに焼土や炭化物を含むピット群からなる焼土遺構を検出した。主柱穴や壁溝となりうる遺構が検出されなかったため土坑としたが、竪穴建物に関連する掘り方土坑の一種かもしれない。遺物は土師器片・須恵器片・鍛冶滓が出土した。図化遺物は No.18・19。

SK04［Ⅰ区 SK03］

調査区内での検出部分はわずかで、深さは地山検出面から約 20cm。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。図化遺物は No.1。

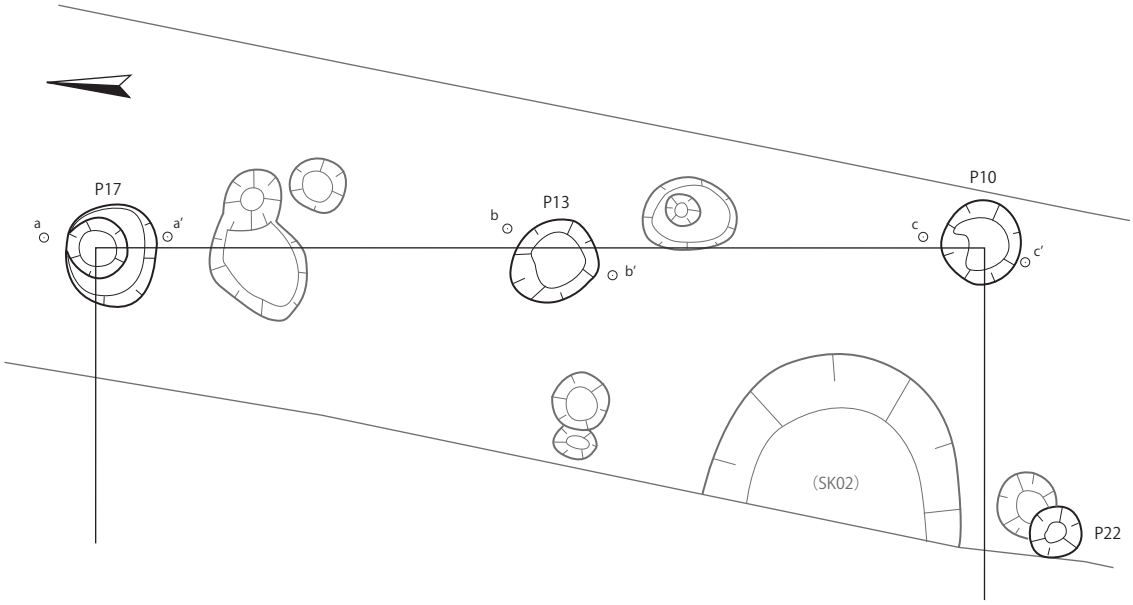
SK05［Ⅰ区 SK04］

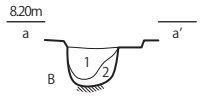
部分的ではあるが平面形は不整円形で、深さは地山検出面から最大約 36cm。底面は平坦に近い。遺物は土師器片がわずかに出土した。

SK06・SK07［Ⅱ区 SK(SI)01・SK(SI)01A］

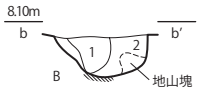
２基の平面不整円形の土坑で、深さはいずれも地山検出面から約 55cm。上層で硬化面を確認し、特に SK06 側に顕著であった。面を形成する３層には遺物や焼土、炭化物が多く含まれる。竪穴建物

SB08［Ⅰ区 P10・P13・P17・(P22)］

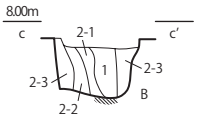




層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山粒少、黒褐色 BL 含有
2 : 10YR 4/6 ; 褐色 ; 埴壌土 ; 弱 ; 堅 ; 1 層より強 ; 地山粒少、黒褐色 BL 含有、焼土粒極少
B : (地山) 10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

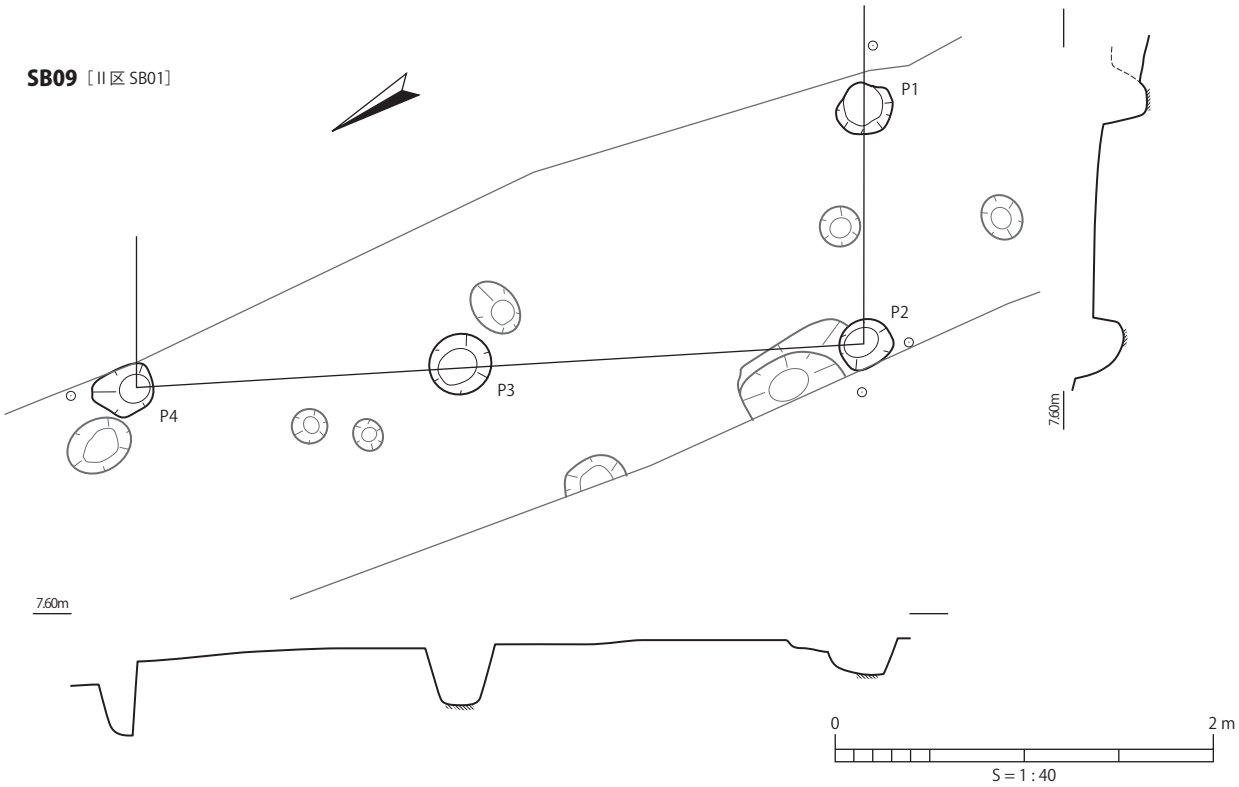


層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山粒含有、黒褐色 BL 少、焼土粒少
2 : 10YR 4/6 ; 褐色 ; 埴壌土 ; 弱 ; 堅 ; 1 層より強 ; 地山 BL 多、黒褐色 BL 含有、焼土粒極少
B : (地山) 10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;



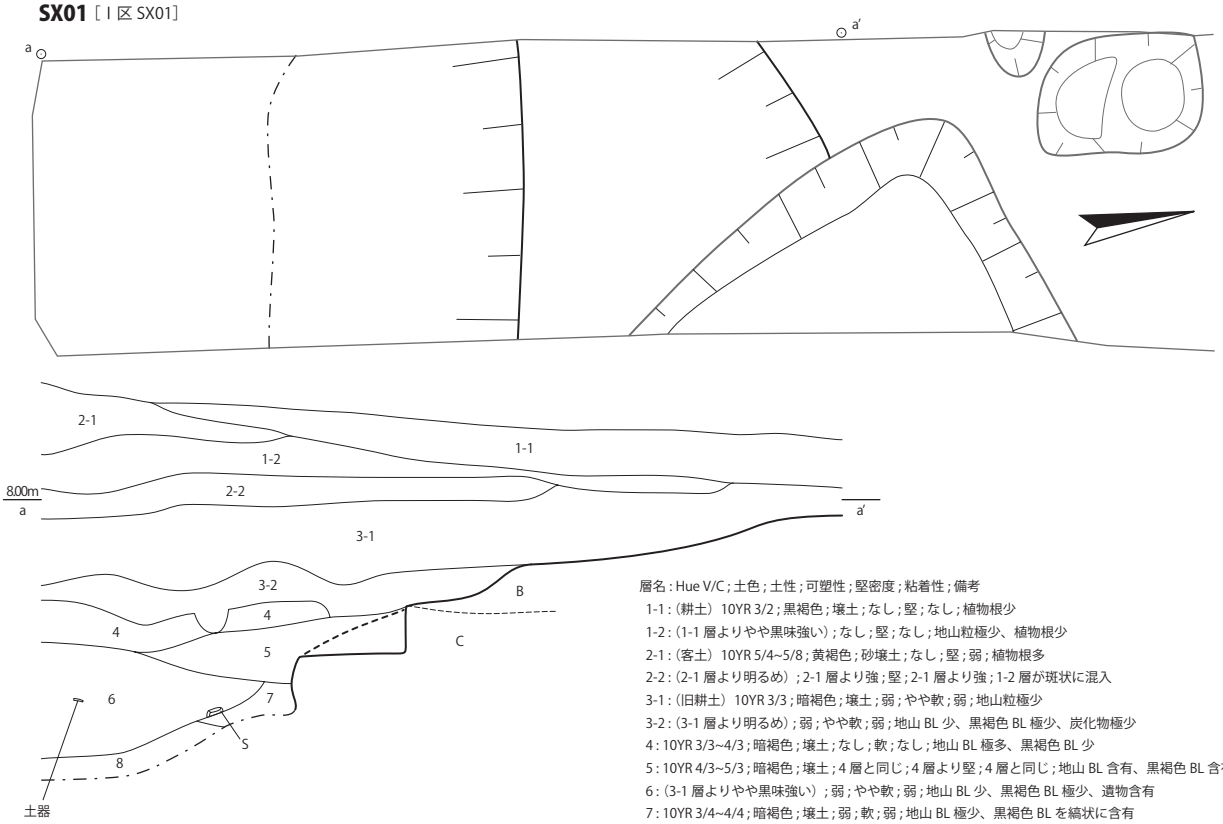
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 : (柱痕) 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山粒少、炭化物極少
2-1 : (掘り方) 10YR 4/4 ; 褐色 ; 壌土 ; 1 層より強 ; 堅 ; 2-3 層より強 ; 地山 BL 含有、黒褐色 BL 極少
2-2 : (掘り方) 10YR 5/4~5/8 ; 黄褐色 ; 壌土 ; 2-1 層と同じ ; 堅 ; 2-1 層と同じ ; 地山 BL 多、黒褐色 BL 多
2-3 : (掘り方) 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 1 層より強 ; 地山粒多
B : (地山) 10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

SB09［Ⅱ区 SB01］



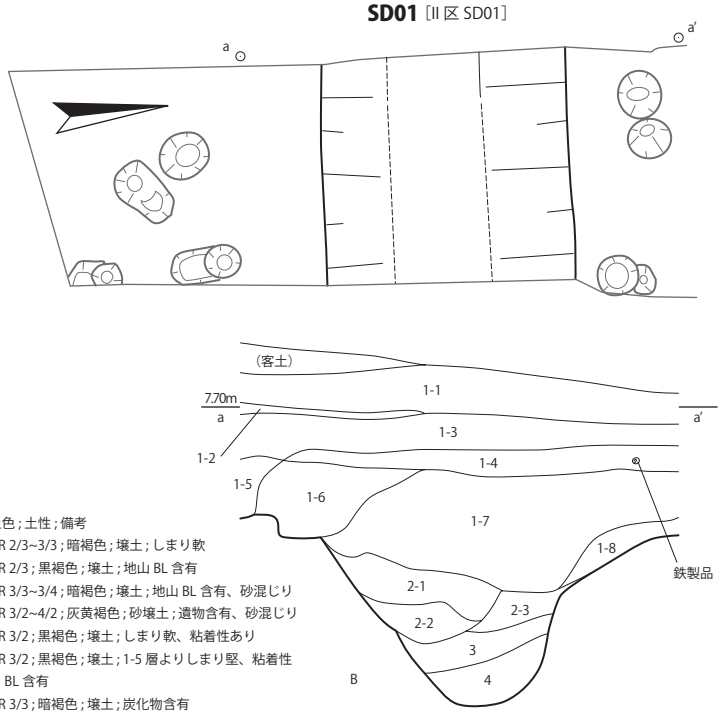
第 6 図　矢田新遺跡　遺構実測図 1

SX01［Ⅰ区 SX01］

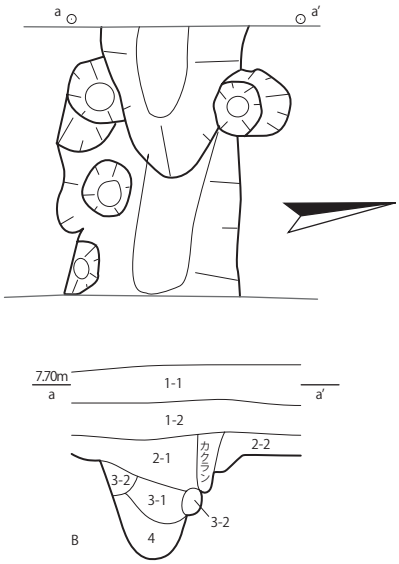


層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1-1 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
1-2 :（1-1 層よりやや黒味強い）; なし ; 堅 ; なし ; 地山粒極少、植物根少
2-1 :（客土）10YR 5/4~5/8 ; 黄褐色 ; 砂壌土 ; なし ; 堅 ; 弱 ; 植物根多
2-2 :（2-1 層より明るめ）; 2-1 層より強 ; 堅 ; 2-1 層より強 ; 1-2 層が斑状に混入
3-1 :（旧耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山粒極少
3-2 :（3-1 層より明るめ）; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山 BL 少、黒褐色 BL 極少、炭化物極少
4 : 10YR 3/3~4/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; なし ; 軟 ; なし ; 地山 BL 極多、黒褐色 BL 少
5 : 10YR 4/3~5/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 4 層と同じ ; 4 層より堅 ; 4 層と同じ ; 地山 BL 含有、黒褐色 BL 含有
6 :（3-1 層よりやや黒味強い）; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山 BL 少、黒褐色 BL 極少、遺物含有
7 : 10YR 3/4~4/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 軟 ; 弱 ; 地山 BL 極少、黒褐色 BL を縞状に含有
8 :（3-1 層より黒味強い）; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山 BL 少
B :（地山）10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;
C :（地山）B 層より灰白色気味、土性等は同じ

SD01［II 区 SD01］



SD02［II 区 SD02］



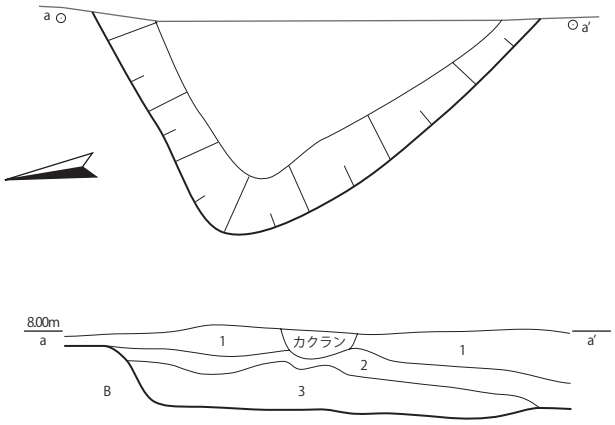
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考
1-1 :（耕土）10YR 2/3~3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; しまり軟
1-2 :（耕土）10YR 2/3 ; 黒褐色 ; 壌土 ; 地山 BL 含有
1-3 :（耕土）10YR 3/3~3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 地山 BL 含有、砂混じり
1-4 :（耕土）10YR 3/2~4/2 ; 灰黄褐色 ; 砂壌土 ; 遺物含有、砂混じり
1-5 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; しまり軟、粘着性あり
1-6 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; 1-5 層よりしまり堅、粘着性あり、地山 BL 含有
1-7 :（耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 炭化物含有
1-8 :（耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ;
2-1 : 10YR 2/2 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 粘着性強く、地山 BL 含有
2-2 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 埴壌土 ; 2-1 層よりしまり堅
2-3 : 10YR 3/4~4/4 ; 暗褐色 ; 埴壌土 ; しまり軟
3 : 10YR 5/6~6/6 ; 黄褐色 ; 壌土 ; しまり軟
4 : 10YR 3/4~4/4 ; 暗褐色 ~ 褐色 ; 壌土
B :（地山）10YR 4/6 ～ 5/6 ; 褐色 ; 埴土 ;

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考
1-1 :（耕土）10YR 2/3~3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; しまり軟
1-2 :（耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ;
2-1 : 10YR 2/2~2/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 含有、炭化物含有
2-2 : 10YR 2/2 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 遺物含有
3-1 : 10YR 2/2~2/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 含有
3-2 ; 10YR 2/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 塊状
4 : 10YR 3/3~3/4 ; 暗褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 含有、炭化物含有
B :（地山）10YR 4/6 ～ 5/6 ; 褐色 ; 埴土 ;

0　　2 m
S = 1 : 40

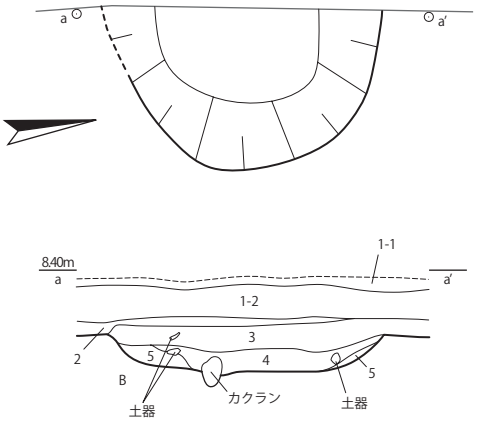
第 7 図　矢田新遺跡　遺構実測図 2

SK01［I 区 SK05］



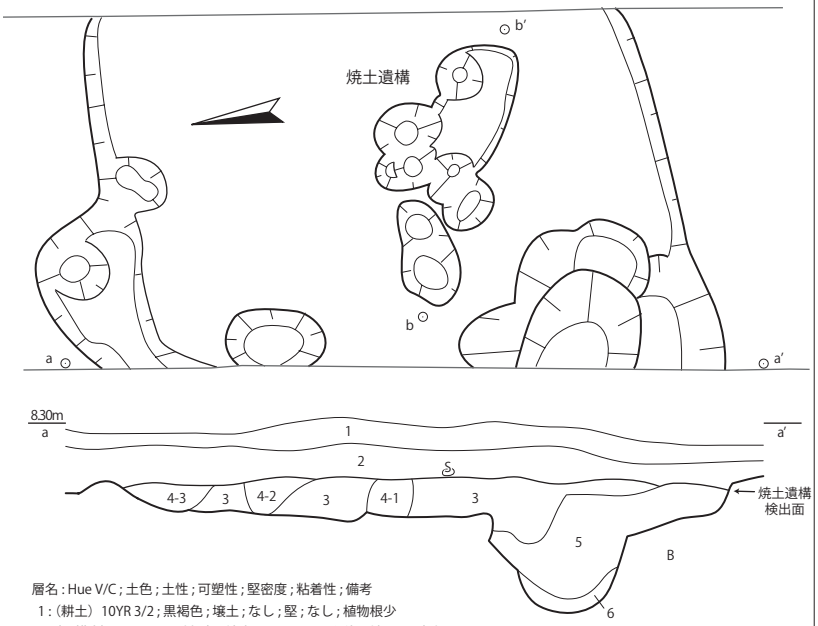
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
2 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 中 ; 地山 BL 極少、黒褐色 BL 極少、焼土粒極少
3 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山 BL 含有、黒褐色 BL 少
B :（地山）10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

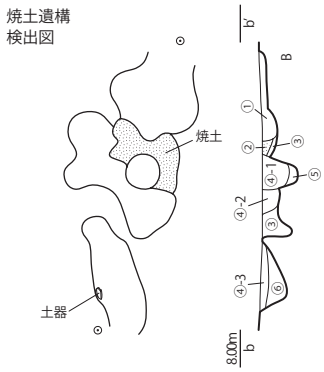
SK02［I 区 SK02］



層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1-1 :（耕土）10YR 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壌土 ; なし ; 軟 ; なし ; 植物根多
1-2 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
2 :（旧耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 中 ;
3 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山 BL 含有、遺物含有
4 : 10YR 2/3 ; 黒褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 4 層より強 ; 地山 BL 多、黒褐色 BL 含有、炭化物含有、焼土粒極少、遺物含有
5 :（地山崩落土）10YR 4/3 ; にぶい黄褐色 ; 壌土 ; - ; - ; 弱 ; 地山粒多
B :（地山）10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

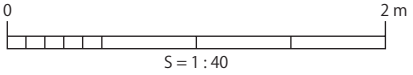
SK03［I 区 SX02］





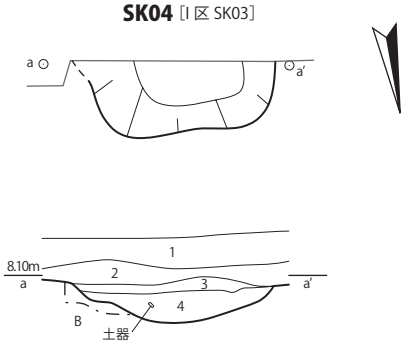
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
① : 10YR 4/6 ; 褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山 BL 含有、焼土粒少
② :（焼土）5YR 4/4~4/8 ; 赤褐色 ; - ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 炭化物含有
③ : 10YR 5/6 ; 黄褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 地山より軟 ; ①層より強 ; 黒褐色 BL 含有
④-1 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山粒含有、焼土粒極少
④-2 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山粒含有
④-3 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山粒極少
⑤ : 10YR 4/6 ; 褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; ①層類似だが、含有物なし
⑥ : 10YR 4/6 ; 褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; ④-3 層より強 ; 地山 BL 多
B :（地山）10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 :（耕土）10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
2 :（旧耕土）10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 上位に地山 BL 含有
3 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 軟 ; 弱 ; 地山 BL 多、黒褐色 BL 含有、焼土粒少
4-1 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 軟 ; 弱 ; 3 層より地山 BL 少・黒褐色 BL 少
4-2 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 軟 ; 弱 ; 3 層より地山 BL 少、4-1 層より黒褐色 BL 多
4-3 : 10YR 3/4 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 軟 ; 弱 ; 4-1・4-2 層より地山 BL 少・黒褐色 BL 少、地山粒少
5 : 10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; 3 層より強 ; 3 層よりやや軟 ; 3 層より強 ; 地山粒少、黒褐色 BL 含有、焼土粒少
6 : 10YR 4/4 ; 褐色 ; 壌土 ; 5 層より強 ; - ; 5 層より強 ; 3 層より地山 BL やや少、黒褐色 BL 含有
B :（地山）10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;



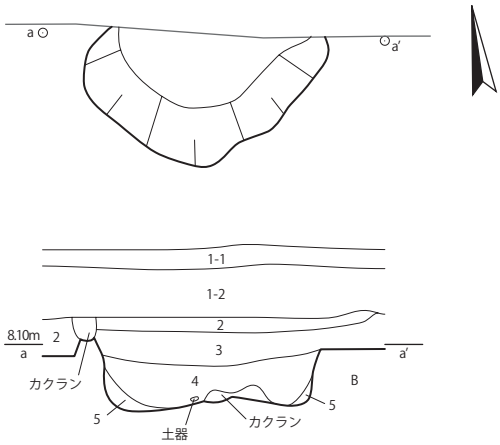
第 8 図　矢田新遺跡　遺構実測図 3

SK04 ［I 区 SK03］



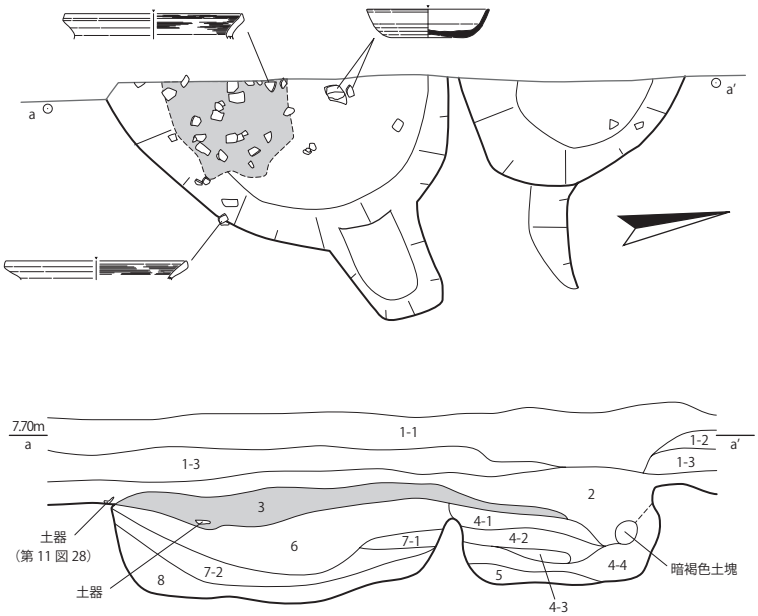
層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1 :（耕土） 10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
2 :（旧耕土） 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 上位に地山 BL 含有
3 : 10YR 4/3 ; にぶい黄褐色 ; 壌土 ; - ; - ; 4 層より弱 ; 2 層と 4 層の漸移層、地山 BL 少
4 : 10YR 4/4 ; 褐色 ; 壌土 ; 弱 ; 堅 ; 弱 ; 地山 BL 多、炭化物含有、遺物含有
B :（地山） 10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

SK05 ［I 区 SK04］



層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 可塑性 ; 堅密度 ; 粘着性 ; 備考
1-1 :（耕土） 10YR 3/1 ; 黒褐色 ; 砂壌土 ; なし ; 軟 ; なし ; 植物根多
1-2 :（耕土） 10YR 3/2 ; 黒褐色 ; 壌土 ; なし ; 堅 ; なし ; 植物根少
2 :（旧耕土） 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 中 ; 上位に地山 BL 含有
3 : 10YR 3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 弱 ; 地山 BL 多、炭化物少
4 : 10YR 2/3 ; 黒褐色 ; 壌土 ; 弱 ; やや軟 ; 4 層より強 ; 地山 BL と炭化物は
4 層より多、黒褐色 BL 含有、遺物含有
5 :（地山崩落土） 10YR 4/3 ; にぶい黄褐色 ; 壌土 ; - ; - ; 5 層より強 ; 地山粒多
B :（地山） 10YR 4/6~5/6 ; 褐色 ; 埴土 ; 中 ; 堅 ; 弱 ;

SK06 ［II 区 SK(SI)01］　**SK07** ［II 区 SK(SI)01A］



層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考
1-1 :（耕土） 10YR 2/3~3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; しまり軟
1-2 :（耕土） 10YR 2/3~3/3 ; 暗褐色 ; 壌土 ; 1-1 層よりしまり堅
1-3 :（耕土） 10YR 3/3 ; 黒褐色 ; 壌土 ;
2 : 10YR 2/2 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 含有、炭化物含有
3 : 2.5Y 2/3~3/3 ; 黒褐色 ~ 暗褐色 ; 埴壌土 ; しまり堅、焼土・炭化物含有、遺物多
4-1 : 2.5Y 2/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 含有、炭化物含有
4-2 : 2.5Y 2/3~3/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 4-1 層より地山 BL・炭化物多
4-3 :（4-2 層より地山 BL 少）
4-4 :（色調暗めで、地山土を斑状に含有）
5 : 2.5Y 3/3 ; 暗褐色 ; 埴壌土 ; 地山 BL 多
6 :（4-1 層に似る）
7-1 : 2.5Y 2/3 ; 黒褐色 ; 埴壌土 ; 6 層より暗く、しまり堅、地山 BL 含有
7-2 :（7-1 層より地山 BL 多）
8 :（5 層に似る）
B :（地山） 10YR 4/6 ～ 5/6 ; 褐色 ; 埴土 ;

硬化面（3 層検出）

0　2 m
S = 1 : 40

第 9 図　矢田新遺跡　遺構実測図 4

に関連する貼り床と考えられ、下層の土坑は掘り方土坑の可能性が高い。遺物は多量の土師器・須恵器と、少量の鍛冶滓が出土した。なお1片だけ瓷器系中世陶器（加賀窯？）がSK06上面付近で出土している。図化遺物はNo.21～25・30・35で、これらは一部を除いて概ね8世紀代に収まる。

第3節　発見された遺物（第10～12図）

出土した遺物は、I区とII区合わせてテンバコ3箱程の分量である。大半を古代の土師器と須恵器が占め、鍛冶滓やフイゴ羽口等の鍛冶関連遺物と鉄製品がそれに次ぐ。

（1）I区出土遺物（1～20）

1～3、20は土師器（質）。1～3は長胴釜の口縁部で、1は古手の在来型煮炊具で古代I期（7世紀前半）、2と3は端部形状から前者が古代III～IV期（8世紀代）、後者が古代IV～V期（8世紀後半～9世紀前半）に比定される。4は鍋口縁で古代III～IV期頃だろうか。5は坏A、6は赤彩埦Aの底部である。20は器種器形が不明の土師質の遺物で、外面に縦位隆帯を貼り付ける。図面で下にした部分は土器底部から剥離したような痕跡をもち、図面右上は円窓状の大孔になると思われる。

7～19は須恵器。7は短頸壺AあるいはBの蓋で、口が開いて端部で屈曲する古代Ⅲ期の特徴をもつ。8と9は坏Bの蓋、10～12は蓋つまみ部で、概ね古代IV～V期の範疇だろう。13は坏B身の台部、14は坏Aの底部である。15は2条の沈線間に工具刺突とカキメを施す𤮈（はそう）もしくは長頸瓶Fの胴部、16は横瓶の頸部、17は長頸瓶Aの台部、18と19は甕の口縁部と胴部と判断した。

（2）II区出土遺物（21～31）

21～25は土師器。21～23は長胴釜の口縁部で、端部形状から古代III～IV期の範疇と思われる。24は長胴釜の胴部で、底部丸底にさしかかる付近の部位である。24は甑の底部とした。

26～31は須恵器。26は坏Bの蓋で、乳頭状の小型つまみと端部折り返しを施さない小法量の特徴をもち、古代Ⅲ期に比定される。27は坏B身の台部。28～30は坏Aで、28と29は体部外傾化する古代Ⅲ～Ⅳ期頃、30は口径が大きくやや古手の古代Ⅲ期の範疇だろう。31は短頸壺の頸部付近である。

（3）鍛冶関連遺物・鉄製品（32～44）

鍛冶関連遺物は、図化した32～35の鍛冶滓のほか、鉄塊系遺物やフイゴ羽口もわずかに確認しているが、包含層（耕土・旧耕土）からの出土が多い。

鉄製品は37～44のような釘と思われる小径で棒状のものが多く出土している。39は先端部で、40は若干屈曲し、43はL字状に大きく屈曲している。

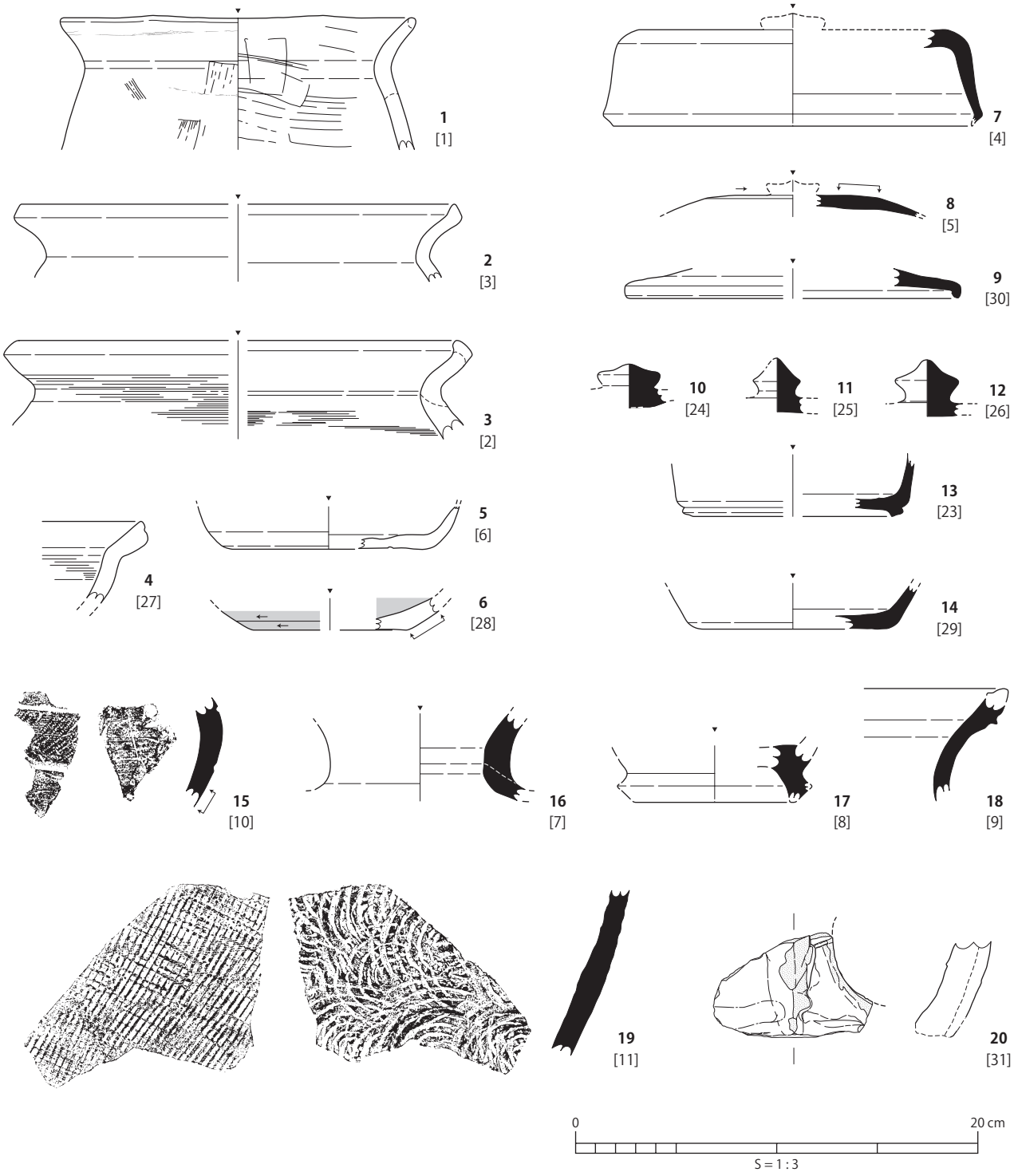
これらは厳密に時期比定できていないため、古代以降のものを含む可能性が高い。

第5節　小結

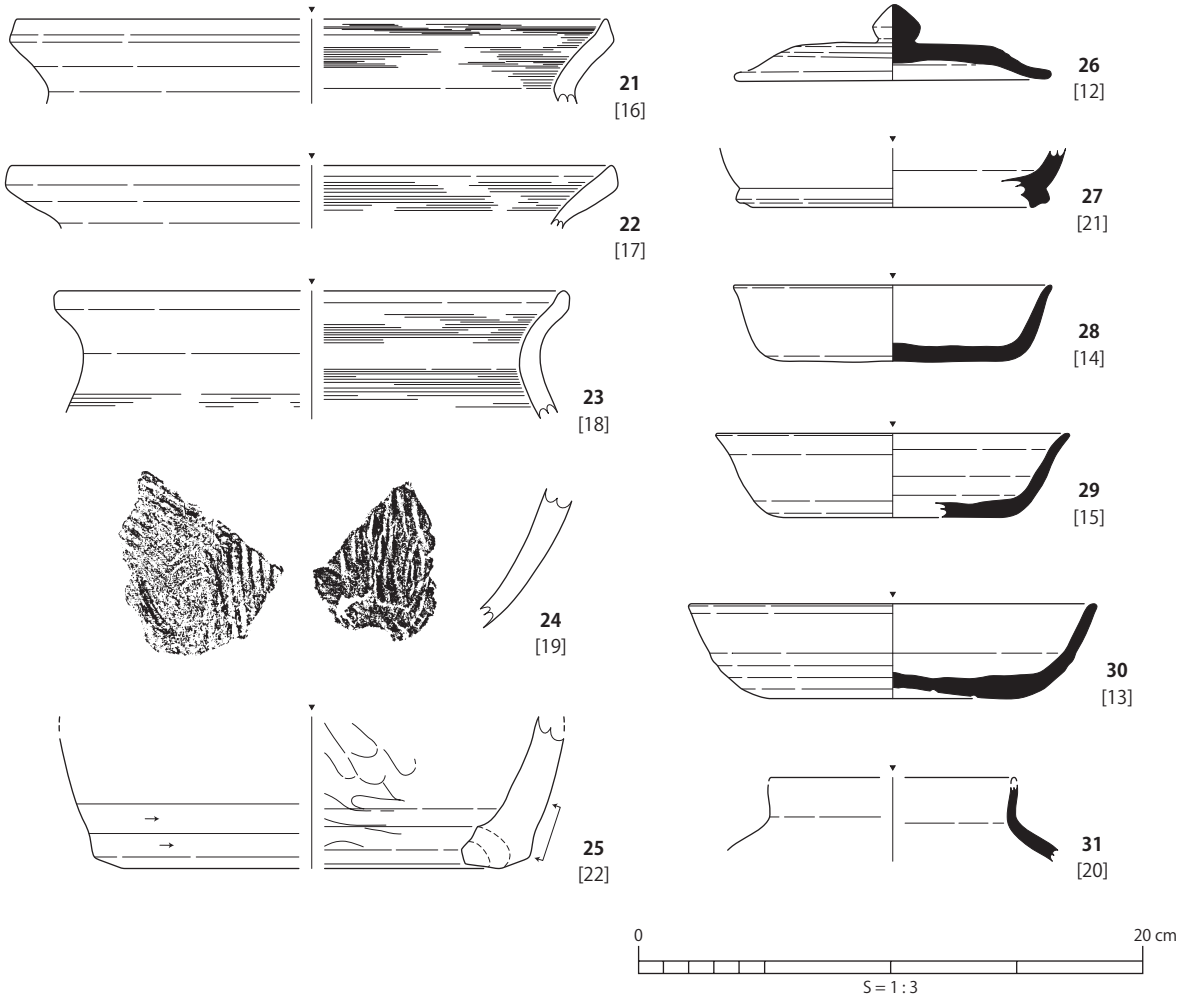
今調査区は、東西方向へ段状に切土・盛土されて耕地化された区域であるため、各調査区の遺構や遺物は削平の影響が比較的少ない東側に濃密だった。狭小な調査区域ではあったが、いくつかの新しい知見が得られた。

遺構は掘立柱建物2棟（SB08・09）のほか、断片的ではあるが焼土や硬化面（貼り床）を伴う土坑（SK03・06・07）は竪穴建物の存在をうかがわせる発見である。また、SX01やSK06・07等の上層からは中近世の遺物が出土しており、古代以降の土地利用の一端が垣間見えた。

遺物は概ね飛鳥～平安時代（7～9世紀代）の土器が出土し、特に8世紀代が中心となるようである。さらに、平成19年度調査で窯道具は出土していたが、鍛冶関連遺物は過去2回の調査では未発見で



第 10 図　矢田新遺跡　遺物実測図 1



第 11 図　矢田新遺跡　遺物実測図 2

あり、本遺跡で出土した意義は大きい。月津台地上に存在する複数の古代集落と同様に、製陶・製鉄に関わった集団が本遺跡にも広がっていたことが示唆される。この点については、今調査区の南西で実施された県埋蔵文化財センターの調査（速報：県埋文 2015）でも古代の鍛冶関連遺物が出土しており、同様の成果が得られている。

参考文献

小松市立博物館 1971「加賀矢田新遺跡の第 1 次調査」『研究紀要』第 6 集
田嶋明人 1988 年「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』
小松市教育委員会 2011 年『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
（公財）石川県埋蔵文化財センター 2015『石川県埋蔵文化財情報』第 34 号

第 12 図　矢田新遺跡　鍛冶関連遺物・鉄製品実測図

第 2 表　矢田新遺跡　出土遺物属性表

図	掲載	整理	区	出土位置	分類	器形	部位 : 寸法 (cm)	/36	重量 (g)	色調 (表層 : 断面)	胎土	焼成	備考
10	1	1	Ⅰ	SK04 覆土	土師器	長胴釜	口 : [17.5], 高 : (6.6)	6		5YR7/8 : 7.5YR8/8	密	良好	古墳後期 - Ⅰ期
	2	3	Ⅰ	SX03 覆土	土師器	長胴釜	口 : [21.5], 高 : (3.8)	2		10YR8/2 : 10YR8/4	密	やや不良	Ⅲ - Ⅳ期
	3	2	Ⅰ	SX01 下層	土師器	長胴釜	口 : [21.8], 高 : (4.9)	3		7.5YR8/6 : 10YR8/4	密	やや良	Ⅳ - Ⅴ期
	4	27	Ⅰ	SD03 覆土	土師器	浅鍋	高 : (4.1)			10YR8/3 : N7	密	不良	Ⅲ - Ⅳ期
	5	6	Ⅰ	SK02 覆土	土師器	坏 A	底 : [10.5], 高 : (2.1)			2.5Y8/3 : 2.5Y8/3	密	良好	
	6	28	Ⅰ	耕土・旧耕土	土師器	赤彩埦 A	底 : [7.9], 高 : (1.6)			7.5YR7/6 : 10YR8/4	密	やや良	Ⅳ期？
	7	4	Ⅰ	SK02 覆土	須恵器	壺蓋	口 : [17.8], 高 : (3.9)			N6 : N7	密	良好	外面釉化、Ⅱ$_3$ - Ⅲ期
	8	5	Ⅰ	SK02 覆土	須恵器	坏 B 蓋	高 : (1.1)			N8 : N8	密	やや不良	
	9	30	Ⅰ	SX03 覆土	須恵器	坏 B 蓋	口 : [16.5], 高 : (1.5)	2		N8 : N8	密	良好	
	10	24	Ⅰ	耕土・旧耕土	須恵器	坏 B 蓋	つまみ径 : 3.1, 高 : (2.1), つまみ高 : 1.3			N6 : N7	密	良好	
	11	25	Ⅰ	耕土	須恵器	坏 B 蓋	つまみ径 : 2.4, 高 : (2.7), つまみ高 : 2			N7 : N7	密	良好	
	12	26	Ⅰ	耕土	須恵器	坏 B 蓋	つまみ径 : 3.6, 高 : (2.8), つまみ高 : 2.1			N7 : N8	やや粗	やや不良	
	13	23	Ⅰ	耕土・旧耕土	須恵器	坏 B 身	台 : [10.9], 高 : (3.1)			N7 : N4	粗	堅緻	
	14	29	Ⅰ	耕土・旧耕土	須恵器	坏 A	底 : [10.5], 高 : (2.1)			2.5Y8/4 : 2.5Y8/4	密	不良	
	15	10	Ⅰ	SX01 覆土	須恵器	甕 or 瓶 F?	高 : (5.4)			10YR8/1 : N5	密	不良	Ⅰ - Ⅱ期
	16	7	Ⅰ	SK02 覆土	須恵器	横瓶	頸 : [9.5], 高 : (4.3)			N6 : N7	密	やや良	頸部接合 A3 類
	17	8	Ⅰ	SX01 覆土	須恵器	瓶 A	台 : [8.0], 高 : (2.6)			N8 : N8	密	良	Ⅳ - Ⅴ期
	18	9	Ⅰ	SK03 覆土	須恵器	甕	高 : (5.1)			N6 : N8	密	やや良	
	19	11	Ⅰ	SK03 内ﾋﾟｯﾄ	須恵器	甕	高 : (8.2)			N7 : N8	密	やや良	外タタキ K 類、内当て具 Db 類
	20	31	Ⅰ	SD03 内ﾋﾟｯﾄ	土師器？	不明	高 : (5.2)			10YR5/3 : 10YR8/3	密	良	
11	21	16	Ⅱ	SK06 No.10 ＋西ｶﾍﾞ精査	土師器	長胴釜	口 : [23.5], 高 : (3.3)	4		7.5YR7/8 : 7.5YR8/6	密	良好	Ⅲ - Ⅳ期
	22	17	Ⅱ	SK06 No.26	土師器	長胴釜	口 : [23.8], 高 : (2.5)	3		10YR8/4 : 10YR8/4	密	良好	Ⅲ - Ⅳ期
	23	18	Ⅱ	SK06・07 覆土	土師器	長胴釜	口 : [20], 高 : (5.1)	3		7.5YR7/8 : 7.5YR7/8	密	良好	Ⅲ - Ⅳ期
	24	19	Ⅱ	SK07 床面直上	土師器	長胴釜	高 : (5.5)			7.5YR6/8 : 10YR8/6	やや粗	良	外タタキ Da 類、内当て具 Ha 類
	25	22	Ⅱ	SK06・07 覆土 ＋ P23	土師器	甑	底 : [17.3], 高 : (6)			7.5YR7/6 : 7.5YR8/6	粗	良好	
	26	12	Ⅱ	旧耕土 (包含層)	須恵器	坏 B 蓋	口 : 12.6, つまみ径 : 1.9, 高 : 3, つまみ高 : 1.5	6		N7 : N8	密	良好	重焼Ⅰ類、Ⅲ期
	27	21	Ⅱ	P2	須恵器	坏 B 身	台 : [11], 高 : (2.3)			N5 : N8	やや粗	やや良	
	28	14	Ⅱ	旧耕土 (包含層)	須恵器	坏 A	口 : [12.6], 底 : [10], 高 : 3	1		N7 : N7	密	良	重焼Ⅲ類、Ⅲ - Ⅳ期
	29	15	Ⅱ	西カベ精査	須恵器	坏 A	口 : [14.1], 底 : [10], 高 : 3.3	2		N7 : N7	密	良	重焼Ⅲ類、Ⅲ - Ⅳ期
	30	13	Ⅱ	SK06 No.20	須恵器	坏 A	口 : [16.2], 底 : [12], 高 : 3.7	11		5Y6/1 : N8	密	堅緻	Ⅲ期
	31	20	Ⅱ	P38	須恵器	短頸壺	口 : [9.6], 高 : (3)	4		5Y6/1 : N7	密	堅緻	
12	32	K1	Ⅰ	耕土・旧耕土	椀形鍛冶滓 (含鉄)		長 : 7, 幅 : 5.3, 厚 : 3.4		133.62				メタル度 : H, 磁着度 : 7
	33	K3	Ⅰ	耕土・旧耕土	椀形鍛冶滓 (含鉄)		長 : 6.7, 幅 : 7.0, 厚 : 3.4		124.54				メタル度 : H, 磁着度 : 4
	34	K6	Ⅰ	SX01 下層	椀形鍛冶滓 (含鉄)		長 : 5.0, 幅 : 4.3, 厚 : 2.0		42.07				メタル度 : H, 磁着度 : 4
	35	K33	Ⅱ	SK06・SK07 覆土	椀形鍛冶滓 (含鉄)		長 : 4.5, 幅 : 4.6, 厚 : 4.2		84.00				メタル度 : H, 磁着度 : 3
	36	K35	Ⅱ	耕土 (1-4 層)	鉄製品		長 : 4.6, 幅 : 4.4, 厚 : 3.2		64.28				メタル度 : L, 磁着度 : 4
	37	K2	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : (2.9), 幅 : 0.9, 厚 : 0.8		1.60				メタル度 : H, 磁着度 : 3
	38	K12	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : (4.8), 幅 : 1.4, 厚 : 1.3		6.10				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
	39	K13	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : (2.5), 幅 : 1, 厚 : 0.7		1.20				メタル度 : H, 磁着度 : 2
	40	K19	Ⅰ	SX01 覆土	鉄製品 (釘？)		長 : (5), 幅 : 1.5, 厚 : 1.3		6.09				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
	41	K20	Ⅰ	SX01 覆土	鉄製品 (釘？)		長 : (3.7), 幅 : 1, 厚 : 1		3.05				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
	42	K23	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : (3.3), 幅 : 1.3, 厚 : 1		38.01				メタル度 : H, 磁着度 : 1
	43	K24	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : 3, 幅 : 1.1, 厚 : 1.1		4.84				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
	44	K38	Ⅱ	耕土 (1-3 層)	鉄製品 (釘？)		長 : 3.8, 幅 : 1.1, 厚 : 1		4.44				メタル度 : H, 磁着度 : 3

図	掲載	整理	区	出土位置	分類	器形	部位 : 寸法 (cm)	/36	重量 (g)	色調 (表層 : 断面)	胎土	焼成	備考
		K4	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄塊系遺物		長 : 4.1, 幅 : 3.6, 厚 : 2.5		42.88				メタル度 : M, 磁着度 : 5
		K5	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2.7, 幅 : 1.6, 厚 : 1.4		5.47				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K7	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : 5.6, 幅 : 2.1, 厚 : 1.7		24.57				メタル度 : 特 L, 磁着度 : 4
		K8	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 4.5, 幅 : 4.3, 厚 : 3.1		38.19				メタル度 : H, 磁着度 : 3
		K9	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3.6, 幅 : 3, 厚 : 2.1		19.38				メタル度 : H, 磁着度 : 2
		K10	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3, 幅 : 2.8, 厚 : 1.7		17.65				メタル度 : H, 磁着度 : 3
		K11	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品 (釘？)		長 : 8.3, 幅 : 1.4, 厚 : 1.1		13.74				メタル度 : M, 磁着度 : 4
		K14(1)	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 1, 幅 : 0.8, 厚 : 0.5		0.22				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K14(2)	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 1.4, 幅 : 1.2, 厚 : 1		1.57				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K14(3)	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 1.3, 幅 : 1.8, 厚 : 1.1		2.40				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K15	Ⅰ	SX01 覆土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 4.2, 幅 : 2.5, 厚 : 2.3		34.97				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K16	Ⅰ	SX01 覆土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3.8, 幅 : 2.2, 厚 : 2.1		17.43				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K17	Ⅰ	SX01 覆土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2.8, 幅 : 2, 厚 : 1.5		8.90				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K18	Ⅰ	SX01 覆土	鉄製品 (釘？)		長 : 5.9, 幅 : 1.7, 厚 : 1.5		7.17				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K21	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3.7, 幅 : 3.6, 厚 : 1.6		29.12				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K22	Ⅰ	耕土・旧耕土	鉄製品		長 : 2.6, 幅 : 0.6, 厚 : 0.6		0.71				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K25(1)	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2, 幅 : 1.8, 厚 :1.5		2.42				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K25(2)	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2, 幅 : 1.4, 厚 : 1.4		3.86				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K26	Ⅰ	SK02 覆土	鍛冶滓		長 :3.6 , 幅 : 3, 厚 : 2.1		10.72				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K27	Ⅰ	SK03 覆土	鍛冶滓 (含鉄・羽口付)		長 : 4.7, 幅 : 3.7, 厚 : 3.4		24.50				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K28	Ⅰ	(旧 SK01 覆土)	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2.3, 幅 : 2.1, 厚 : 1.3		5.45				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K29	Ⅰ	P4	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2.5, 幅 : 2.3, 厚 : 1		5.25				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K30	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓		長 : 3.6, 幅 : 3.2, 厚 : 1.2		12.08				メタル度 : なし , 磁着度 : 1
		K31	Ⅰ	耕土・旧耕土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 2, 幅 : 1.4, 厚 : 0.9		3.57				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K32(1)	Ⅰ	耕土・旧耕土	羽口		長 : (3), 幅 : (3.8), 厚 : 1.9		16.46				
		K32(2)	Ⅰ	耕土・旧耕土	羽口		長 : (2.5), 幅 : (2.9), 厚 : 1.7		11.36				
		K32(3)	Ⅰ	耕土・旧耕土	羽口		長 : (3.4), 幅 : (2.1), 厚 : (2.2)		4.36				
		K34	Ⅱ	SK06・SK07 覆土	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3.4, 幅 : 2.4, 厚 : 2.3		8.50				メタル度 : H, 磁着度 : 3
		K36	Ⅱ	南ｶﾞ精査	鉄製品（破片多数）		長 : 4.1, 幅 : 3.6, 厚 : 1.8		85.85				メタル度 : 特 L, 磁着度 : 5
		K37	Ⅱ	遺構精査	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 4, 幅 : 2.4, 厚 : 2.3		18.52				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K39	Ⅱ	P13	鍛冶滓 (含鉄)		長 : 3.1, 幅 : 2.1, 厚 : 1		4.82				メタル度 : なし , 磁着度 : 2
		K40	Ⅱ	P36	鍛冶滓 (含鉄)		長 :1.9 , 幅 : 1.8, 厚 : 1.1		4.09				メタル度 : なし , 磁着度 : 1

【遺物観察表 凡例】

・(　) は残存値、[　] は復元値、長さ・幅・厚さは最大値、／ 36 は口縁部残存率を示す

・色調は表層の釉化部分や赤彩、黒班を除く色調と断面色調を示す

・胎土は密、やや粗、粗の 3 段階、焼成は堅緻、良好、やや良、良、やや不良、不良 (生焼) の 5 段階の相対的な評価である

・磁着度は標準磁石を用いて計測し、1 ～ 8 までの数値で磁着の大きさを表す

・メタル度は専用金属探知機を用いて計測し、銹化 (△)・H(○)・M(◎)・L(●)・特 L(☆) の順で感度の高さ (金属鉄の残存度) を表す

【土層註表記 (一部除く)】

可塑性：NP（なし）＜ SP（弱）＜ P（中）＜ VP（強）＜ EP（極強）

堅密度：VL（すこぶるしょう）＜ L（しょう）＜ S（軟）＜ H（堅）

＜ VH（すこぶる堅）＜ EH（固結）

粘着性：NS（なし）＜ SS（弱）＜ S（中）＜ VS（強）

※日本ペトロジー学会編 1997 年『土壌調査ハンドブック改訂版』 に基づく

第Ⅲ章　五郎座貝塚発掘調査

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

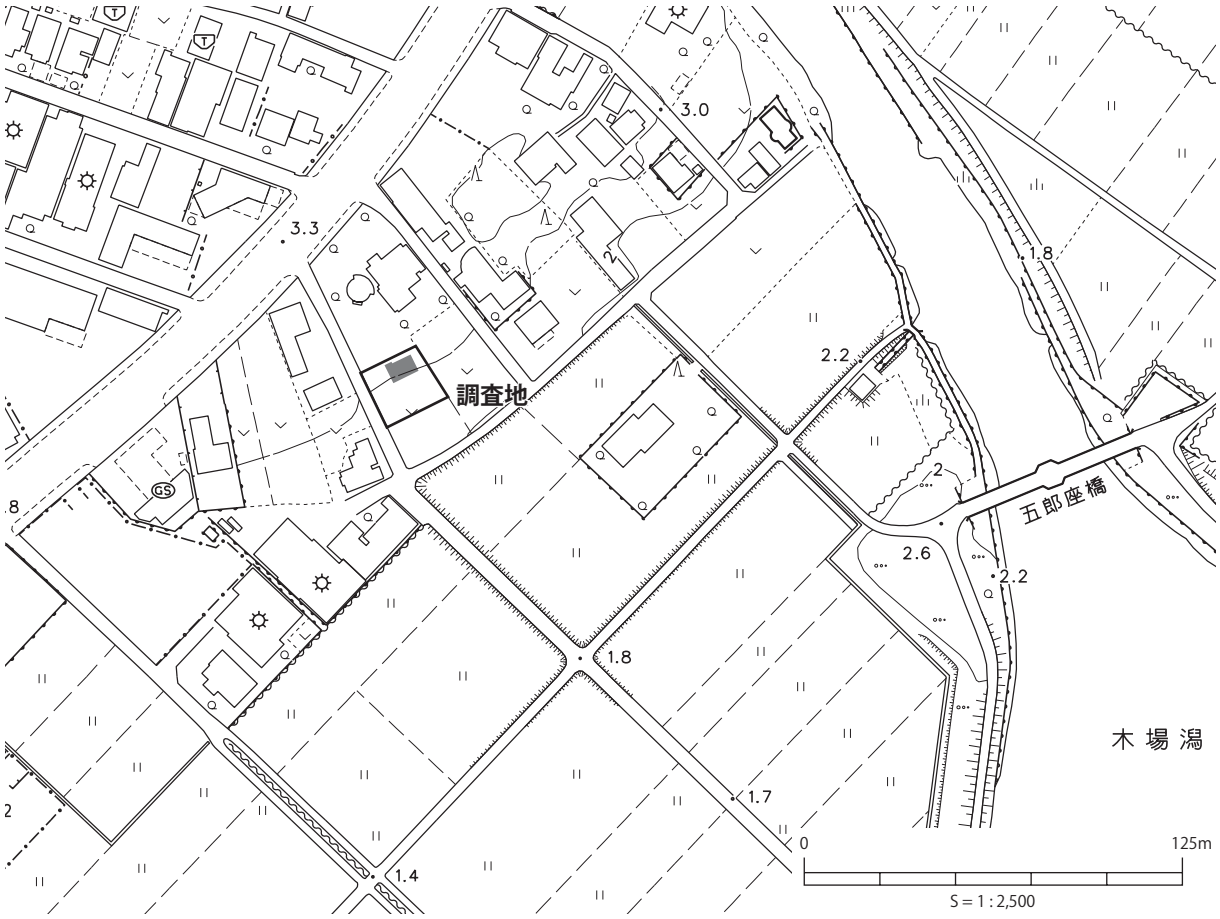
小松市今江町地内での住宅新築計画について、平成 25 年３月 15 日付けで個人（以下、依頼主）より埋蔵文化財の取り扱い協議を受けた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「五郎座貝塚」の範囲に含まれていることから、試掘調査によって埋蔵文化財の有無の確認が必要と回答した。

「五郎座貝塚」は当該地の西側にかつて存在した「五郎座台地」に立地する縄文時代の貝塚を伴う集落跡として周知されているが、台地は削平によって現存しない。当該地の試掘調査が必要だったのは、台地の周縁部の削平を受けていない範囲に含まれていたことによる。

試掘調査は２度にわたって実施した。

１回目は平成 25 年３月 26 日に実施、当初はそれほど深くない予想だったこともあり、手掘りでの調査としたが、盛土が予想外に厚かったために掘り切れず、主に中世の遺物を確認したところで後日再調査することになった。

２回目は年度をまたいで平成 25 年４月 18 日に実施、今度は重機を用いた。この結果、盛土は約 70cm あり、この下に黒色～黒褐色の壌質土が約 60cm、この層から主に古代～中世の遺物を確認した。地山は淘汰された中粒～粗粒砂層であり、この上に黒色～黒褐色の砂質土（いわゆる「クロスナ」）



第 13 図　五郎座貝塚　調査地の位置

を部分的に認め、この層から多数の縄文土器片を確認した。

2 回目の試掘調査の結果、「五郎座貝塚」として周知されている遺跡の範囲に含まれているとして、翌日の 4 月 19 日付けで依頼主に埋蔵文化財の適切な保護措置が必要と回答した。これを受けて、まず翌 5 月 9 日付けで文化財保護法 93 条の発掘届が提出され、地盤改良の方法の検討もされて来たが、最終的には表層改良が採用された。これによって、埋蔵文化財の現状保存が不可能となり、発掘届は 5 月 16 日付けで、発掘調査による記録保存を講じる旨を付記して石川県教委文化財課に進達した。

2　調査の経過と概要

発掘調査は 5 月 23 日に着手、翌 6 月 13 日に完了した。

重機による表土除去は盛土掘削とし、壌質土からは作業員による手掘り掘削とした。縄文時代の包含層と考えられるクロスナ層の範囲をおさえる目的であり、結果、それは試掘トレンチを挟んで大小二つの略円形プランとなった。特に大きい方のプランは、検出までに縄文土器片などの出土が多く、竪穴建物跡の可能性も想定して作業にあたってもらったが、結果を先に述べれば、この想定は空振りだった。

調査地は、台地の周縁部だったこともあり緩やかな傾斜地だが、盛土と壌質土を取り除いた状態では殆ど傾斜がない。実際には台地の外側の（旧）浜堤列の範囲だったのであり、調査範囲に台地の埴質土が一部に見える予想を事前に立てていたが、こちらも空振りだった。

現地調査は、クロスナ層で埋まった二つの土坑を調査して終了となり、埋め戻した上で依頼主に引き渡してすべての作業を完了した。

3　出土品整理

出土遺物の整理は、分類･接合･実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成 29 年度に実施した。デジタルトレース等についても、平成 29 年度内に実施したものである。

第 2 節　遺構と遺物

1　層位の所見（第 15 図）

前節試掘調査段階の所見と発掘調査の所見（第 16 図 西壁）及び遺物取り上げ層位（第 3 表）を対応させると、盛土＝ I・II 層＝盛土、壌質土＝ III・IV 層＝包含層、砂質土＝ V 層＝地山、となる。

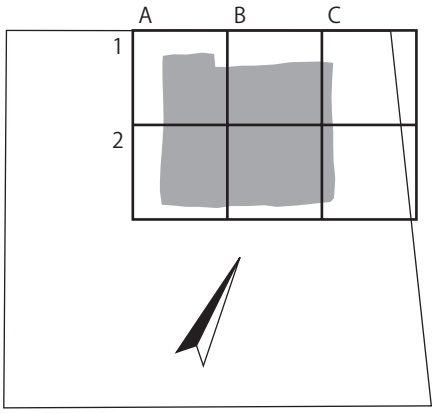
遺物の出土状況は、大雑把にまとめると、クロスナ層＝縄文時代以降、壌質土＝古代以降、盛土＝中世以降である。ただし、壌質土層は、地山砂やこの層に含まれていたと見られるノジュールがしばしば認められるなど不自然な地層であり、整地等の土木工事で形成された地層と考えられる。

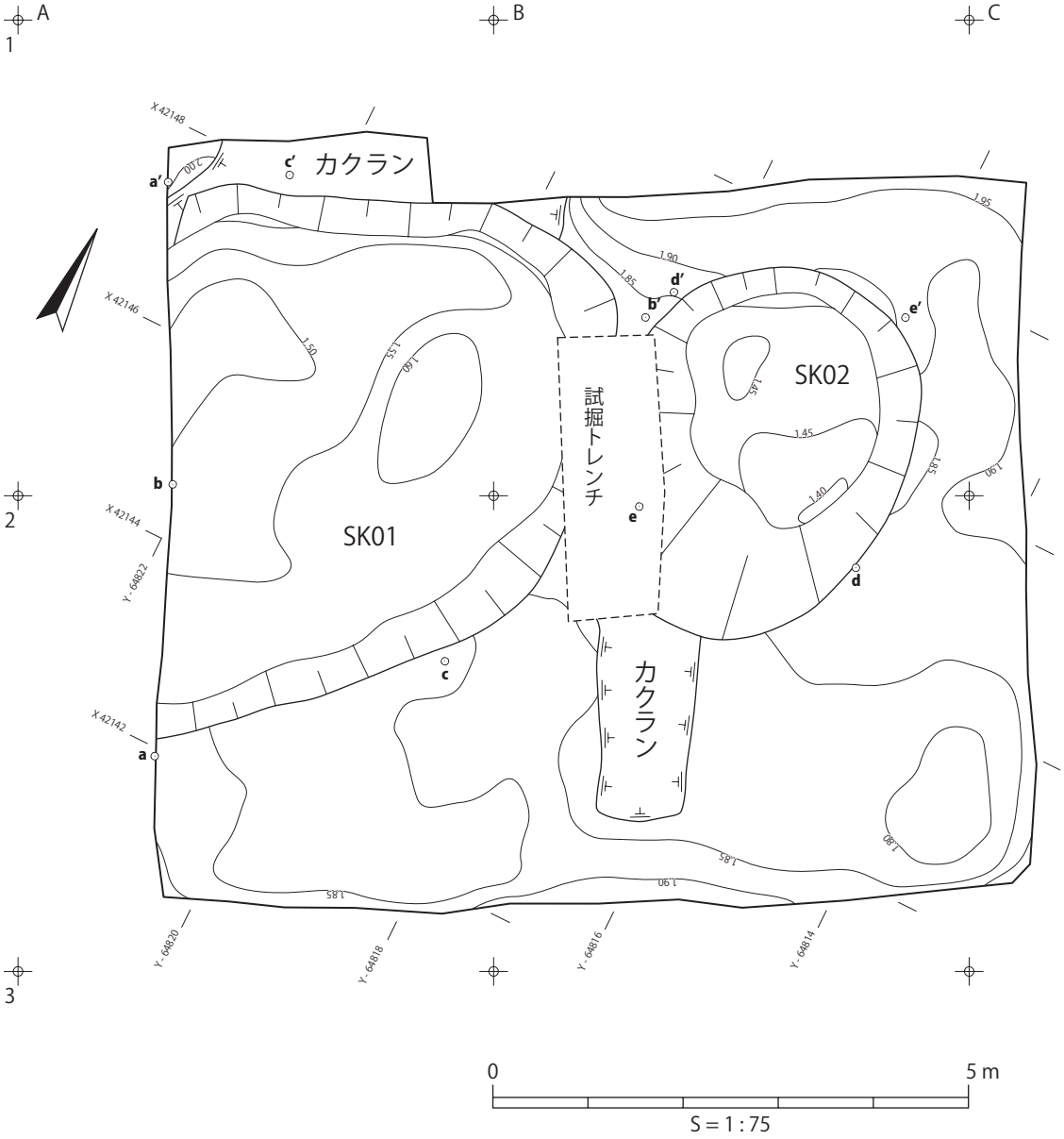
2　遺　構（第 14 ～ 15 図）

SK01　いびつな楕円形プランで、短径 4.7m、長径 5m 以上、地山砂層検出レベルから約 30cm まで掘り下げられた竪穴状遺構である。底面は、いくらか凹凸はあるものの概ね水平に整形されているが、焼面や柱穴等は認められない。掘方は完全には埋まっておらず、流れ込んだクロスナ層 (1･2 層) が輪状に分布しており、浅い擂鉢状の状態で壌質土 (III・IV 層) がその上に堆積している。

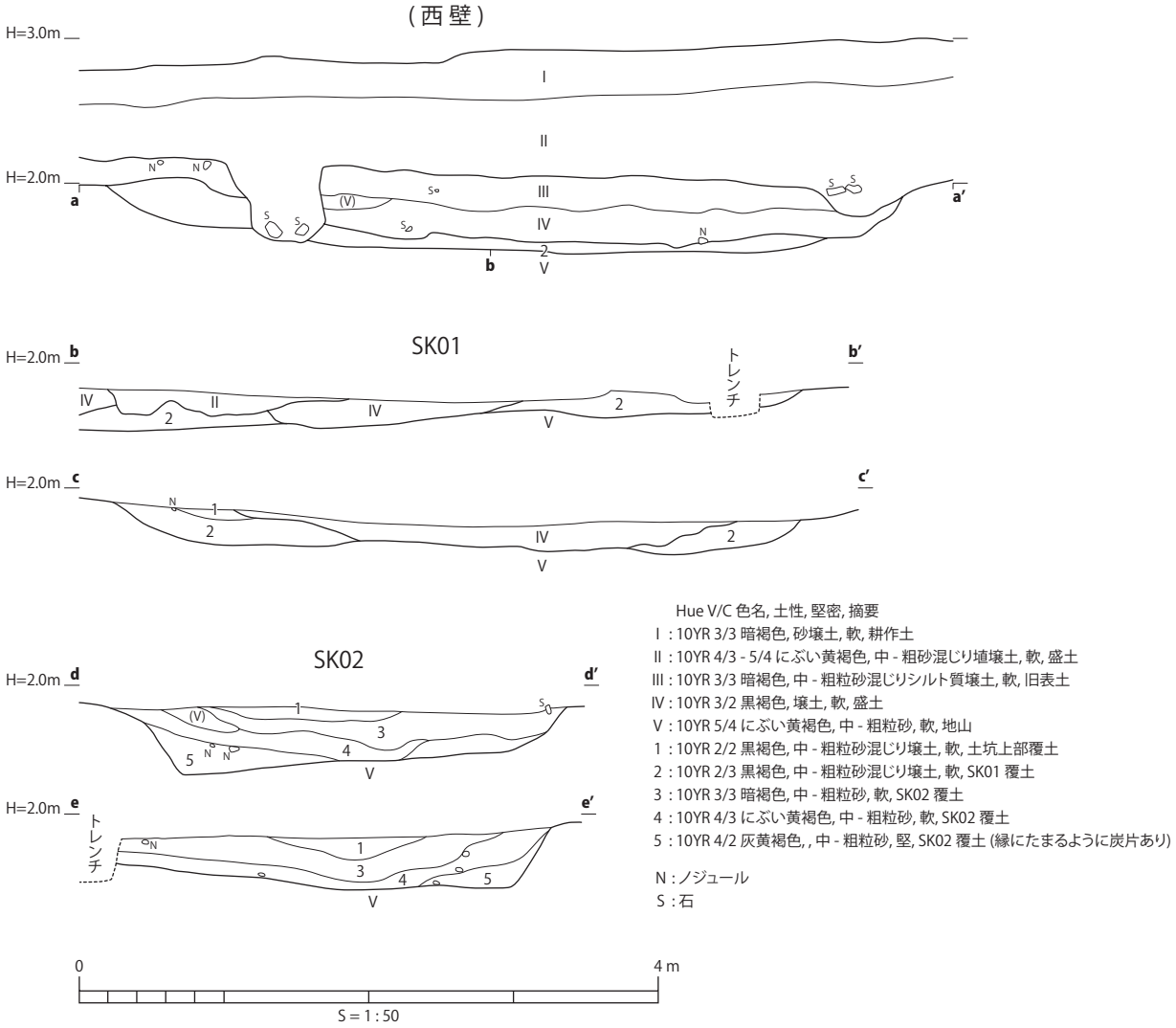
遺物をよく包含していたのはクロスナ層で、縄文土器や弥生土器は概ねここからの出土である。

SK02　比較的整った楕円形プランで、短径 3m、長径 3m 以上、地山砂層検出レベルから約 50cm まで掘り下げられた土坑である。底面は北に傾斜しており、下層に炭混じりの堅さを感じる砂 (5 層) がたまっていた。この砂は、土坑のプランからはみ出して壌質土と地山砂層の間にも認められた。





第 14 図　五郎座貝塚　平面図



第 15 図　五郎座貝塚　断面図

3　遺　物（第 16 ～ 19 図）

⑴　縄文時代の土器（1 ～ 45）

1 は、中期後葉か末葉の土器と思われる。破片が小さく文様や器形の類似例を挙げられないが、極粗粒砂が疎らに練り込まれた胎土の厚手の土器は、この時期固有の特徴ではある。

2 ～ 6 は、後期前葉の土器である。おそらく同一個体か、少なくとも同じデザインの深鉢形土器であり、気屋式に類似している。器形、文様構成、5・6 のように縦向きの条が太い右撚りの単節縄文といった特徴は気屋式そのものだが、最も目立つ特徴である三角刺突文が細かく刻み込んだ沈線のようになっている。

7 も後期前葉の土器の底部だが、狭義の気屋式より時期が下る薄手で内外面が丁寧に研磨された深鉢形土器と思われる。

8 ～ 12 は、後期後葉の土器である。浅く幅広の凹線を特徴とする井口式である。凹線の中まで丁寧に磨いているため、施文具まで分からないが、12 の区切文は竹管等の筒状工具のようだ。

13 ～ 25 は、後期後葉の粗製土器である。粗製といってもこの時期は丁寧な作りで、内面は口縁

端面までしっかり磨いている。13・16 ～ 23 の縄文は右撚りの単節縄文、14・15・24 は外面も磨き、25 の条痕はサルボウ等の二枚貝を用いている。

26 ～ 28 は、後期後葉の粗製土器の底部である。圧痕や調整などは分からない。

29 ～ 31 は、晩期の土器である。29 は、左拠り単節縄文で沈線文様に磨消縄文の加飾をする御経塚式で晩期前葉、30・31 は浮線網状文土器で晩期末葉である。

32 ～ 45 は晩期末葉の粗製土器である。こちらは名のとおりの粗製であり、内面のミガキは明確でなくどちらかといえばナデ調整で口縁部はそれほど丁寧な作りではない。32・33 は外面もナデ調整で、35 ～ 45 はイネ科草束の条痕文となる。35・45 は内面側。条痕文である。時期的には、晩期末葉のほかに弥生前期にあたる柴山出村式を含むと思われるが､両者を分類で区分し切れない。ただ、35 のように口縁端部を細かく刻むのは柴山出村式の特徴ではある。

極粗粒砂が疎らに練り込まれた胎土は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期前葉にも見られる。すなわち 32 ～ 45 がそうだが、こちらは中期のものと比べて明らかに薄手で、区別は容易な部類である。

⑵　弥生時代の土器（46 ～ 50）

46 ～ 49 は中期前葉の土器である。いわゆる条痕文系であり、イネ科草束を用いる点では縄文時代晩期の伝統を継承しているといえる。

48・49 は同個体であり、49 の破片だけ接合面がなかった。頸部が大きく外反し、その上に鋭角に内側へ折れ曲がる口縁部がつく受口状口縁が特徴的で、頸部以下はイネ科草束の条痕で文様が描かれるが、口縁部はヘラ状工具で重方形文や矢羽根状文など、前後の時期の在地土器に共通する意匠が採用されている。

50 は中期中葉の櫛描文系土器である。口径が推定できなかったが、器種はおそらく直口系の壷形土器と思われる。

⑶　縄文～弥生時代の石器（51 ～ 58）

51 は角柱状の残核で、両極打撃されている。素材剥片剥離というよりは楔形石器としての使用の結果だろうが、端部が丸く磨り減っていることから、最終的には穿孔具として使用されたようだ。

52 は打製石鏃である。平基無茎の三角形で、基部は殆ど調整されていない。

53 は打製石錐である。特に用途の定まらない剥片の一角に突起を作出したものだが、「石錐」というよりは「穿孔具」として 51 と共に分類上一括した法がよいかもしれない。

54 は緑色凝灰岩で、各面がそれぞれ剥離痕となっていて角柱状に加工する途上とすれば、管玉製作工程品といえる。現代の砕石の可能性もあるが、少なくとも調査当時、出土位置は砕石の混入が発生する環境ではなかった。

55 は打製石斧の基部破片である。火山礫凝灰岩の礫端片を加工している。57 は同じ石材の礫石錘である。

56 は、安山岩の細長い円礫の一端が欠けているが、全面を覆う擦痕に一部が覆われている。

58 は、よく焼けた流紋岩の礫片に顕著な擦痕が認められ、と石として用いられたと考えられる。

これらの石器は、54 を除いて縄文時代晩期末～弥生時代中期までの時期の土器の伴うと考えられる。54 が玉作資料なら、弥生時代末～古墳時代前期にかけてのものといえるだろう。

⑷　古墳時代～古代の土器（59 ～ 75）

59 ～ 64 は、61 を除いて古墳時代前期の土師器である。59 はくの字口縁の甕形土器、60 は有段口縁の壷形土器、62・63 は小型器台、64 は鉢形土器である。

61 は、口縁端部の特徴から、古代Ⅳ期の範疇で 8 世紀後半の甕形土器（釜）か。

65 ～ 75 は須恵器である。65・66 は坏 G のそれぞれ蓋と身であり、古代 II 期の範疇で 7 世紀後半であろう。74・75 は壷である。こちらは断片的だが、稜を成さない肩部と下半が叩き整形がされていることから、坏 G と同時期のものと思われる。67 ～ 75 の甕胴部片は、時期比定できる属性を見いだせないが、叩き目や当て具痕は同一工具の可能性があり、同個体かもしれない。

⑸　中世の土器（76 ～ 79）

76 は珠洲の壷である。轆轤成形と叩き成形が知られているが、後者のタイプである。

77 はかわらけである。精緻な胎土の京都系とされるタイプである。実測の対象とした 3 点は同個体で、うち 2 点に油煤が認められ、この個体は灯明皿として使用されたと考えられる。

78 は瀬戸・美濃の小型の壷であり、茶入れであろう。

79 は李氏朝鮮時代の粉青沙器の皿である。白化粧土を掻き落として文様を成す剥地と呼ばれるものである。

中世の遺物は積極的に年代に言及できる資料とは言えないが、高麗青磁の流れを汲む粉青沙器は 16 世紀前半まで生産された。

⑹　その他の遺物（80 ～ 86）

80 ～ 83 は椀形鍛冶滓である。月津台地の古代集落遺跡で必ずと言ってよいほど出土する代表的な遺物といえるが、中世御幸塚城周辺施設の遺物の可能性も考慮すべきか。

84 ～ 86 は土錘である。木場潟を臨む立地条件から、すべて漁網錘と考えてよいだろう。

第 3 節　小結

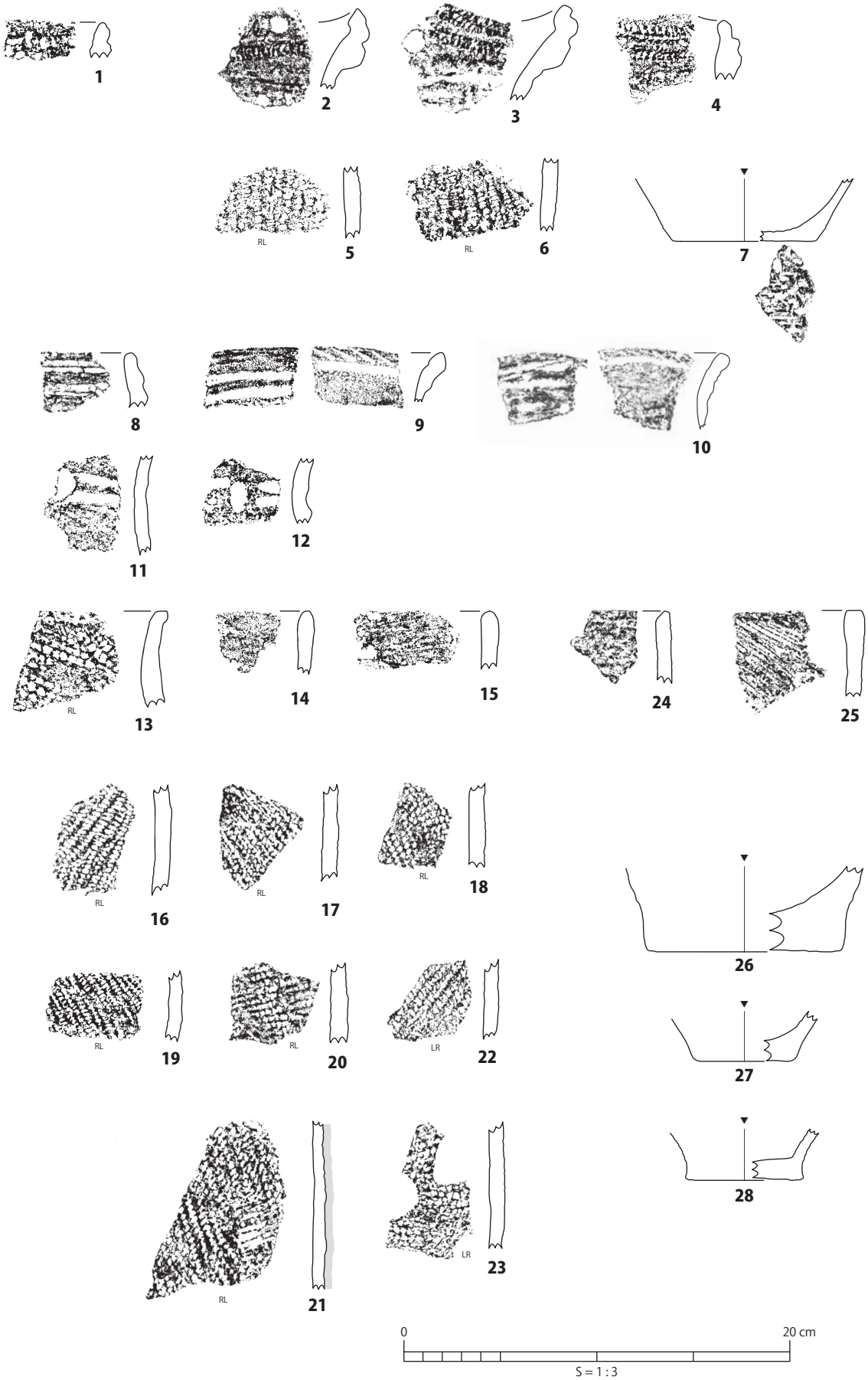
冒頭で述べたように、五郎座貝塚はかつて存在した「五郎座台地」に立地する縄文時代の貝塚を伴う集落跡であり、その発見は、昭和 34 年から 5 年に渡って土採取工事現場で土器や石器が採集されたもので、遺構が確認された訳ではない。貝層にしても、台地の麓で井戸を掘る時に貝層に当たることは古くから知られていたものの「貝塚」を確認したものではなかったが、平成 19 年度に下水道工事に立ち会うことによって、時代不詳ながら貝層があることを記録には残している。

今調査区は、台地の麓に下りた潟畔の砂地にあり、調査した 2 基の土坑（または竪穴状遺構）はこの砂層を掘ったものである。掘削時期は不明だが、土坑に伴う可能性のある遺物で最も年代が新しいのは須恵器であり、これらで編年的な位置が分かる資料は 7 世紀代である。

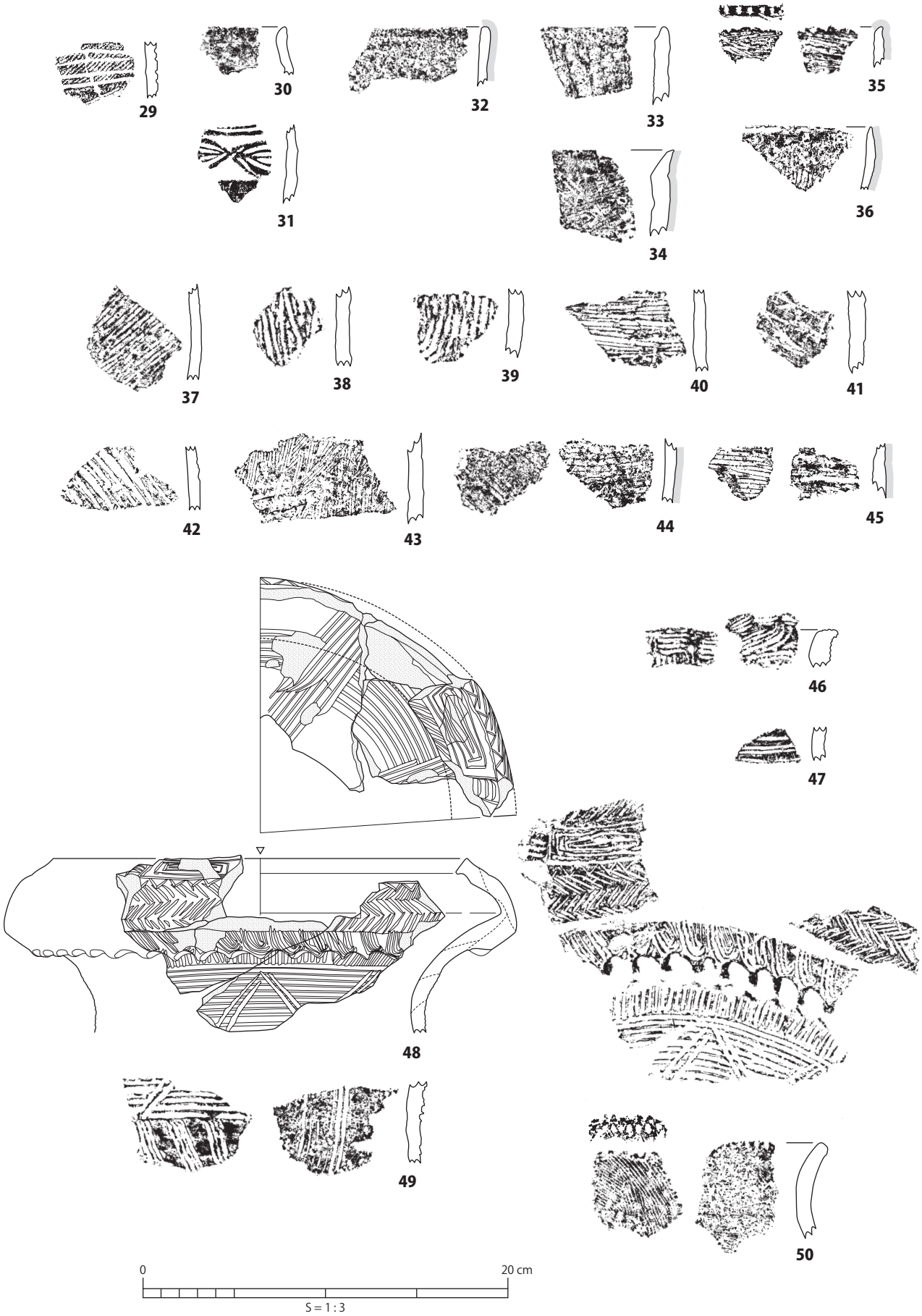
これらの土坑が砂地ごと埋まったのは自然堆積などではなく、人為的な要因と考えなければならない。本報告で壌質土＝ III・IV 層とした土層がこれにあたり、この層準より上位に中世遺構の遺物が包含する。非常に短絡的ではあるが、今調査地周辺で大規模な土木工事があったとすれば御幸塚城であり、歴史的には、文安 2 (1445) 年に富樫泰高が南加賀半国守護となった頃から、慶長 5 (1600) 年の浅井畷の戦いの頃まで、すなわち 15 世紀後半～ 16 世紀の城である。本報告の中世遺物も、概ねこの時期と照らして矛盾しない。

参考文献

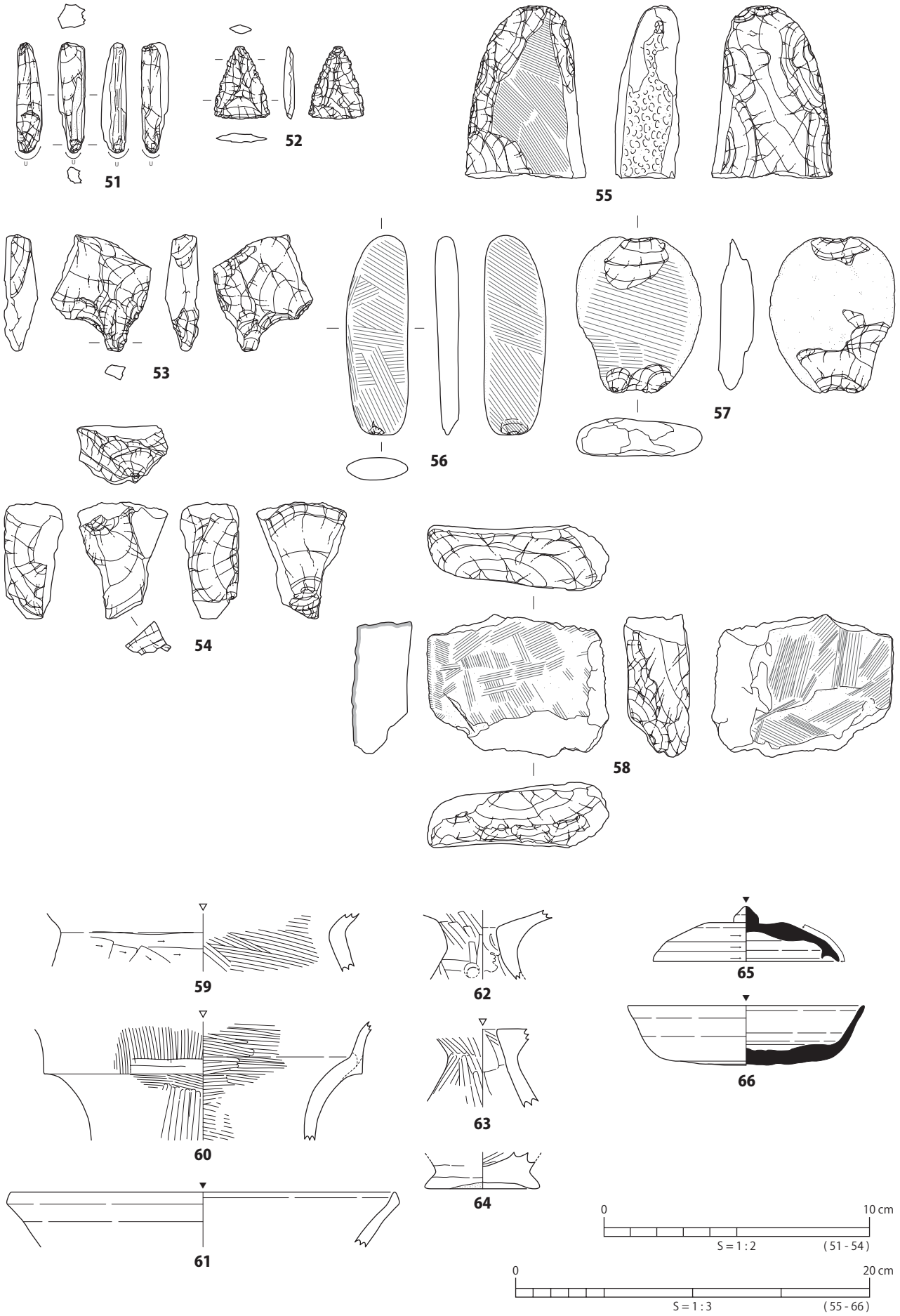
川 良雄 1969 年『今江潟と今江町の歴史』今江町公民館 石川県小松市
小松市教育委員会 2000 年『今江五丁目遺跡』
今江町史編纂委員会 2015 年『今江町史』今江町町内会 石川県小松市



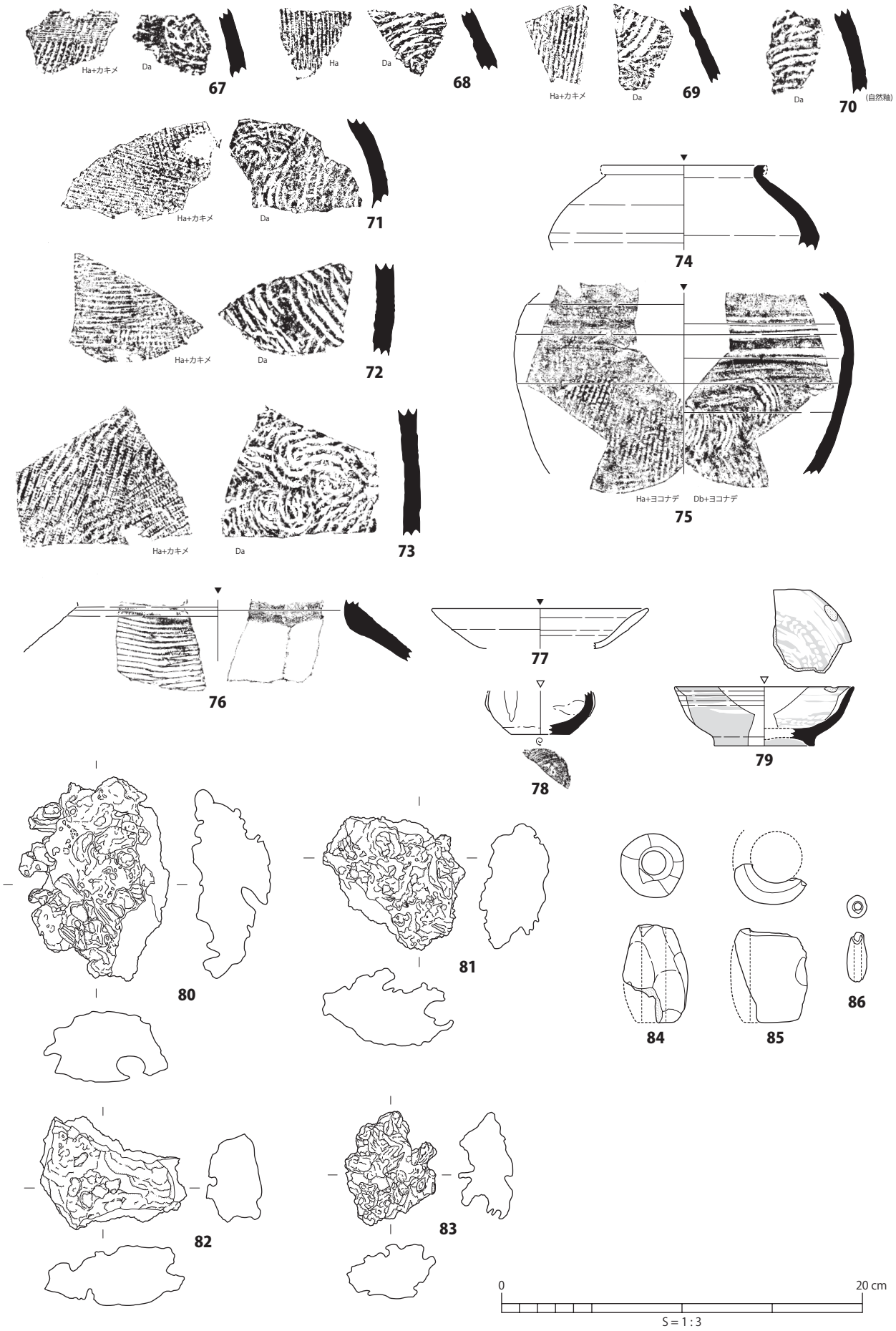
第 16 図　五郎座貝塚　出土遺物実測図 1



第 17 図　五郎座貝塚　出土遺物実測図 2



第 18 図　五郎座貝塚　出土遺物実測図 3



第 19 図　五郎座貝塚　出土遺物実測図 4

第 3 表　五郎座貝塚　遺物属性表

図	番号	実測	出土位置	分類	器形	寸法 / 残率	表層色調	胎土色調	備考
1	1	な 48	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 7/3	2.5Y 4/1	中期後葉？
1	2	な 46	SK02-III	縄文土器	深鉢		10YR 7/3	10YR 7/2	気屋
1	3	な 47	SK02-III	縄文土器	深鉢		10YR 6/3 - 6/2	10YR 6/2	気屋
1	4	な 45	B-1 包 (SK02)	縄文土器	深鉢		10YR 6/2	10YR 5/1	気屋
1	5	な 43	B-1 包 (SK02)	縄文土器	深鉢		10YR 6/4 - 8/3	10YR 6/1	気屋
1	6	な 44	B-1 包 (SK02)	縄文土器	深鉢		10YR 6/4 - 8/3	10YR 6/1	気屋
1	7	な 49	A-2 包 (SK01)	縄文土器	深鉢	底 : 7cm/0.167	10YR 6/3 - 2.5Y 5/2	2.5Y 4/1	後期
1	8	な 52	B-2 盛	縄文土器	深鉢		5YR 6/4 - 5/3	2.5Y 4/1	井口
1	9	な 53	SK01-III	縄文土器	深鉢		10YR 7/4	10YR 6/3	井口
1	10	な 54	A-1 盛	縄文土器	深鉢		2.5Y 4/2	10YR 3/2	井口
1	11	な 50	B-1 包 (SK02)	縄文土器	深鉢		10YR 7/2 - 3/1	10YR 5/2	井口
1	12	な 51	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 7/3 - 3/1	2.5Y 4/1	井口
1	13	な 15	SK01-I	縄文土器	深鉢		2.5Y 6/1	2.5Y 7/2	後期粗製
1	14	な 20	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 7/3 - 5YR 6/8	10YR 6/1	後期粗製
1	15	な 18	SK02-III	縄文土器	深鉢		10YR 6/3	2.5Y 4/1	後期粗製
1	16	な 16	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 7/4 - 5YR 6/4	2.5Y 4/1	後期粗製
1	17	な 17	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 6/2	10YR 6/2	後期粗製
1	18	な 58	A-2 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 7/3	10YR 5/2	後期粗製
1	19	な 59	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 5/2	10YR 5/1	後期粗製
1	20	な 57	A-2 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 7/2	2.5Y 6/1	後期粗製
1	21	な 55	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		2.5Y - 10YR 6/2	2.5Y 5/1	後期粗製
1	22	な 56	B-2 包	縄文土器	深鉢		10YR - 7.5YR 7/3	2.5Y 6/1	後期粗製
1	23	な 60	SK02-I	縄文土器	深鉢		10YR 7/3	7.5YR 6/3	後期粗製
1	24	な 19	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 6/2	2.5Y 3/1	後期粗製
1	25	な 66	SK02-I	縄文土器	深鉢		10YR 8/3 - 7/1	10YR 8/4 - 7/2	後期粗製
1	26	な 21	SK01-I	縄文土器	深鉢	底 : 10cm/0.139	10YR 7/3	10YR 6/1	後期粗製
1	27	な 23	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢	底 : 5cm/0.167	10YR 7/3	2.5Y 5/1	後期粗製
1	28	な 22	A-1 盛	縄文土器	深鉢	底 : 6cm/0.250	10YR 7/3	2.5Y 5/1	後期粗製
2	29	な 67	SK01-I	縄文土器	深鉢		2.5Y 5/2	2.5Y 3/1	御経塚
2	30	な 72	B-1 包 (SK02)	縄文土器	浅鉢		10YR 5/2 - 4/1	10YR 4/1	長竹 - 乾
2	31	な 68	SK01-III	縄文土器	浅鉢		2.5Y 6/4 - 4/1	2.5Y 3/1	長竹 - 乾
2	32	な 62	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 5/2	2.5Y 4/1	晩期粗製
2	33	な 63	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 5/3	10YR 5/2	晩期粗製
2	34	な 64	SK01-I	縄文土器	深鉢		7.5YR 7/4 - 6/4	2.5Y 6/1	晩期粗製
2	35	な 71	B-1 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		7.5YR 7/6 - 10YR 5/2	10YR 5/2	晩期粗製
2	36	な 61	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 6/2	5Y 3/1	晩期粗製
2	37	な 37	A-2 包 (SK01)	縄文土器	深鉢		10YR 8/3 - 7.5YR 6/4	2.5Y 4/1	晩期粗製
2	38	な 38	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 7/3 - 7.5YR 6/3	10YR 6/2	晩期粗製
2	39	な 39	B-1 包 (SK02)	縄文土器	深鉢		10YR 5/3 - 6/3	2.5Y 4/1	晩期粗製
2	40	な 40	A-1 盛	縄文土器	深鉢		10YR 6/3 - 7.5YR 6/4	10YR 6/2	晩期粗製
2	41	な 41	SK02-I	縄文土器	深鉢		10YR 7/3	10YR 4/2	晩期粗製
2	42	な 42	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 6/3 - 7/4	10YR 5/2	晩期粗製
2	43	な 65	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 7/4 - 5/2	5Y 3/1	晩期粗製
2	44	な 69	SK02-I	縄文土器	深鉢		10YR 6/4	2.5Y 5/1	晩期粗製
2	45	な 70	SK01-I	縄文土器	深鉢		10YR 5/2	10YR 5/2	晩期粗製
2	46	な 76	SK02-I	弥生土器	壷		10YR 6/3	10YR 6/2	弥生条痕文系
2	47	な 73	B-1 包 (SK01)	弥生土器	壷		10YR6/3	10YR 6/2	弥生条痕文系
2	48	な 78	A-2 包 (SK01)	弥生土器	壷	口 : 28cm/0.222, 頸 : 18cm/0.167	7.5YR 6/4	10YR 6/2	弥生条痕文系
2	49	な 74	SK01-I	弥生土器	壷		7.5YR 6/4	2.5Y 5/1	弥生条痕文系
2	50	な 75	A-2 包 (SK01)	弥生土器	壷		10YR 8/3	10YR 8/2	弥生櫛描文系
3	51	に 05	SK01-I	残核石器	穿孔具	長 : 4.1cm, 幅 : 1.0cm, 厚 : 1.0cm, 重 : 5.02g, 黒色安山岩			
3	52	に 06	A-1 盛	打製石鏃		長 :(2.7)cm, 幅 : 2.0cm, 厚 : 0.4cm, 重 : 1.83g, 黒色安山岩			
3	53	に 07	SK01-III	打製石錐		長 : 4.4cm, 幅 : 3.8cm, 厚 : 1.3cm, 重 : 13.74g, 流紋岩			
3	54	に 08	SK02-IV	玉作工程品？	分割片	長 : 4.4cm, 幅 : 3.4cm, 厚 : 2.2cm, 重 : 25.60g, 緑色凝灰岩			
3	55	に 01	B-1 包 (SK01)	打製石斧		長 :(9.8)cm, 幅 :(6.8)cm, 厚 :(3.6)cm, 重 : 303.9g, 火山礫凝灰岩			
3	56	に 09	B-1 包 (SK01)	磨石叩石類	鎚石	長 : 11.3cm, 幅 : 3.5cm, 厚 : 1.4cm, 重 : 77.7g, 安山岩			
3	57	に 10	A-1 盛	礫石錘		長 : 8.8cm, 幅 : 7.1cm, 厚 : 2.2cm, 重 : 168.2g, 火山礫凝灰岩			
3	58	に 02	SK02-IV	砥石		長 :(8.1)cm, 幅 :(10.3)cm, 厚 : 3.7cm, 重 : 254.9g, 流紋岩			
3	59	な 27	A-2 包 (SK01)	土師器	釜	頸 : 16cm/0.139	2.5YR 6/6	5YR 7/6	古墳前期
3	60	な 31	A-1 盛	土師器	壷	口 : 18cm/0.083	7.5YR 7/4	10YR 8/4	古墳前期
3	61	な 28	B-1 包 (SK01)	土師器	釜	口 : 22cm/0.056	7.5YR 7/6	10YR 8/3	8c 後半？
3	62	な 32	B-1 包 (SK01)	土師器	器台	脚 : 4cm/1.000	5YR 7/6	5YR 7/6	古墳前期
3	63	な 30	B-2 包	土師器	器台	脚 : 4cm/0.167	10YR 6/3	7/5YR 7/3	古墳前期
3	64	な 29	A-2 包 (SK01)	土師器	鉢	底 : 6cm/0.333	7.5YR6/4 - 6/3	10YR 7/3	古墳前期
3	65	な 80	SK02-II	須恵器	坏 G 蓋		10YR 6/1	N 6/0	7c 後半
3	66	な 79	SK02-II	須恵器	坏 G		N 7/0	N 7/0	7c 後半
4	67	な 01	B-1 包 (SK01)	須恵器	甕		N 4/0	N 5/0	
4	68	な 02	A-2 盛	須恵器	甕		N 5/0	N 5/0	
4	69	な 03	A-1 盛	須恵器	甕		N 5/0 - 3/0	5YR 5/1	
4	70	な 07	SK01-I	須恵器	甕		N 4/0	N 5/0	
4	71	な 04	A-1 盛	須恵器	甕		N 5/0 - 3/0	N 5/0	
4	72	な 05	SK01-IV	須恵器	甕		N 4/0	5YR 5/1 - 2.5Y 6/3	
4	73	な 06	B-1 包 (SK01)	須恵器	甕		N 6/0	2.5Y 6/2	

図	番号	実測	出土位置	分類	器形	寸法 / 残率	表層色調	胎土色調	備考
4	74	な 09-10	A-1 盛	須恵器	壷	口 : 9cm/0.111	N 5/0	N 7/0 - 6/0	
4	75	な 08	SK01-I	須恵器	壷	胴 : 18cm/0.194	N 5/0	N 6/0	
4	76	な 14	B-1 盛	珠洲	壷	頸 : 15cm/0.083	N 5/0	N 7/0	
4	77	な 11-13	B-2 包	かわらけ	皿	口 : 12cm/0.278	7.5YR 7/3 - 7/2	7.5YR 8/2 - 5/1	
4	78	な 34	A-1 盛	瀬戸美濃	茶入	底 : 3cm/0.389	10Y 6/2	2.5Y 8/1	
4	79	な 33	B-1 盛	粉青沙器	椀	口 : 10cm/0.167, 台 : 5.5cm/0.167, 高 : 3.3cm	5GY 6/1	N 6/0	
4	80	に 03	SK02-III	椀形鍛冶滓	含鉄	長 :(11.3)cm, 幅 :(8.3)cm, 厚 : 4.4cm, 重 : 315.7g, 磁着 : 2, メタル : M			
4	81	に 04	SK02-III	椀形鍛冶滓		長 :(7.4)cm, 幅 : 7.8cm, 厚 : 4.5cm, 重 : 197.9g, 磁着 : 1, メタル : なし			
4	82	に 12	A-1 盛	椀形鍛冶滓		長 :(6.3)cm, 幅 :(8.1)cm, 厚 : 3.2cm, 重 : 164.1g, 磁着 : 1, メタル : なし			
4	83	に 11	A-1 盛	椀形鍛冶滓		長 : 6.3cm, 幅 : 5.0cm, 厚 : 3.0cm, 重 : 84.5g, 磁着 : 1, メタル : なし			
4	84	な 24	SK01-I	土製品	土錘	長 : 5.5cm, 径 : 3.6cm , 孔 : 1.3cm, 重 : 43.0g	2.5Y 7/4	2.5Y 5/1	
4	85	な 25	B-2 攪	土製品	土錘	長 : 5.3cm, 重 : 30.2g	2.5Y 7/3	2.5Y 8/3	
4	86	な 26	B-1 包 (SK01)	土製品	土錘	長 :(2.7)cm, 径 : 1.1cm , 孔 : 0.4cm, 重 : 2.4g	7.5YR 6/4 - 6/6	7.5YR 6/4	

第Ⅳ章　松谷廃寺跡確認調査

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

白山信仰の重要寺院である中宮八院の一つである松谷寺跡の確認調査について、平成 18 年度から平成 21 年度の 4 ヶ年にわたって実施したところだが、この過程で発見されたのは 8 世紀前半まで成立期が溯る可能性のある古代山林寺院遺構と考えられた。

これを受けて、従来の中宮八院としての「松谷寺」と区別するために呼称を「松谷廃寺」と改め、平成 22 ～ 24 年度に継続して調査を実施することとなった。

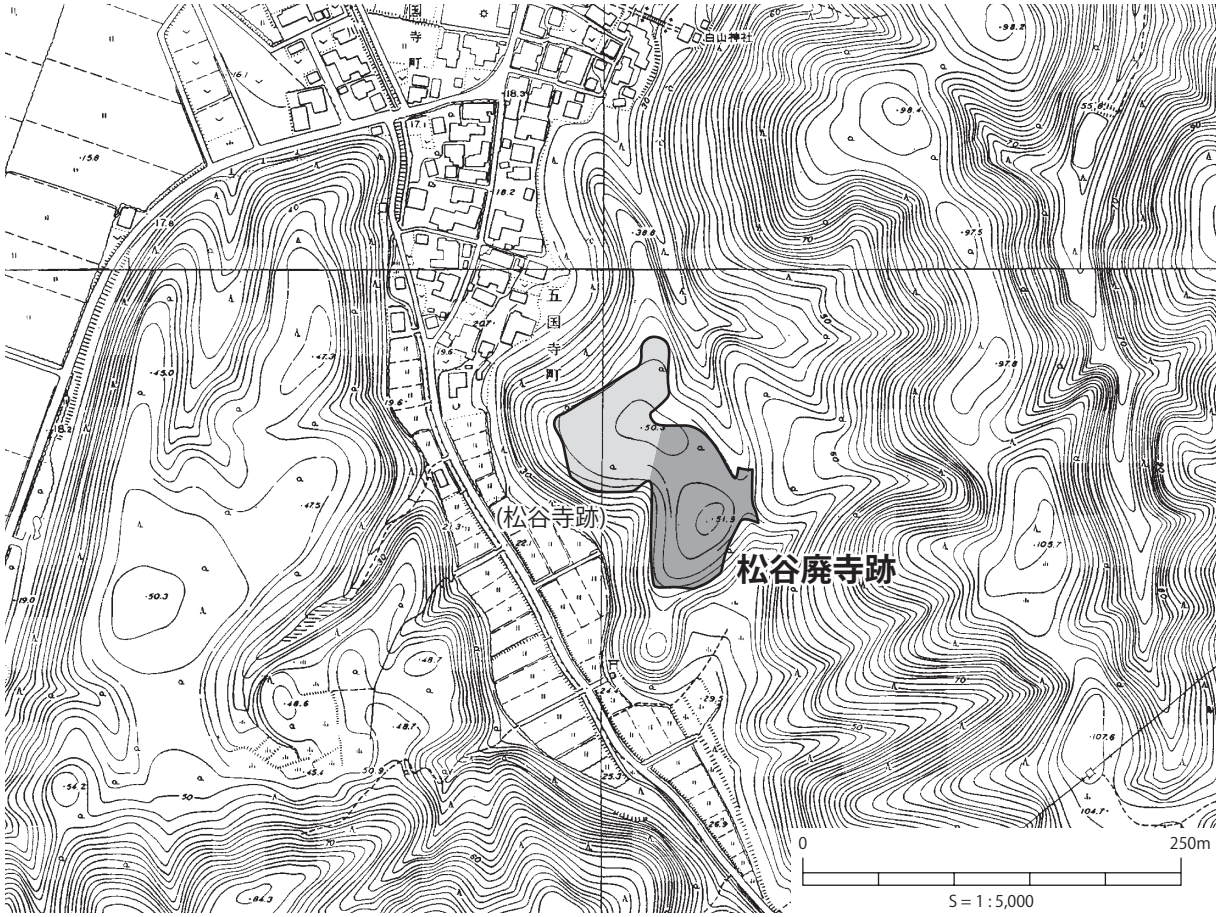
２　調査の経過と概要

松谷廃寺跡として調査を継続したのは、松谷寺跡の包蔵地範囲を東側半分、平成 21 年度までの確認調査で「平坦面 A」である。ここで検出された礎石建物跡の補足調査と関連遺構の精査が主な目的である。

［平成 22 年度］

基壇 A とその周辺に新たなトレンチを設定して補足調査を実施したところ、礎石建物 A は東に 1 間延長し、3 間× 4 間となった。

また、調査対象とした平坦面 A の北端に塚状遺構 1 基、集石遺構 2 基を確認した。



第 20 図　松谷廃寺跡　調査地位置図

［平成 23 年度］

礎石建物 A のトレンチをさらに追加･拡張して調査を継続した結果、規模は東にさらに 2 間延長し、4 間× 5 間となり、これ以上延長しないことも確認した。

また、前年発見された塚状遺構と集積遺構を 3 基とも塚状遺構として詳細に調査、鎌倉時代から南北朝時代のものと考えられる石塔（相輪）が出土し、ここでようやく「松谷寺」の時期に係る時期の遺構を発見することとなった。

［平成 24 年度］

前年の補足調査。すべての記録作業を終えてから、今回発見された遺構を砂で保護した上で埋め戻し、今回の調査を完了とした。

3　出土品整理

出土遺物の整理は、分類･接合･実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成 29 年度に実施した。デジタルトレース等についても、平成 29 年度内に実施したものである。

本来は、この後平成 24 ～ 28 年度まで実施した、同じく中宮八院の一つである蓮華寺跡の報告に合わせる予定であったが、調査完了から年数が経過したことと今後の国庫補助事業全体の出土品整理計画の都合から、ここで一旦報告して区切りとすることとなった。

蓮華寺跡については、こちらも松谷廃寺跡と同様に古代に溯る山林寺院跡と推定される遺構と遺物が発見されたため、平成 27 年度からは加賀国府・国分寺関連遺跡としての確認調査としており、松谷廃寺跡の評価は蓮華寺跡の出土品と記録の整理を待って、両者併せて行なうものとしたい。

第 3 節　確認調査の成果

1　遺構（第 21 ～ 24 図）

今回の調査対象となった平坦面 A は、西面と南面を削り出しによって造成されたと考えられる、北辺約 17.5m、南辺約 16.5m、東辺約 9m、西辺約 11m を測る略台形である。北面は緩斜面になっており、ほとんど造成の痕跡は認められず、自然の地形を大きく改変するような造成は見られない。これは東面についても同様である。

この平坦面南端の最高所に整形された基壇 A があり、平成 18 ～ 19 年の確認調査で礎石建物 A は 2 間× 4 間まで確認し、仏堂と評価したものの、建物の構造を復元するには規模が小さく、この点で補足調査が必要だった。それが平成 22 年度からの今回調査である。

平坦面北端では塚状遺構が 3 基発見された。発見の引き金になったのは 1 号塚の円礫の集中であり、3 基の中では最も保存状態が良い。

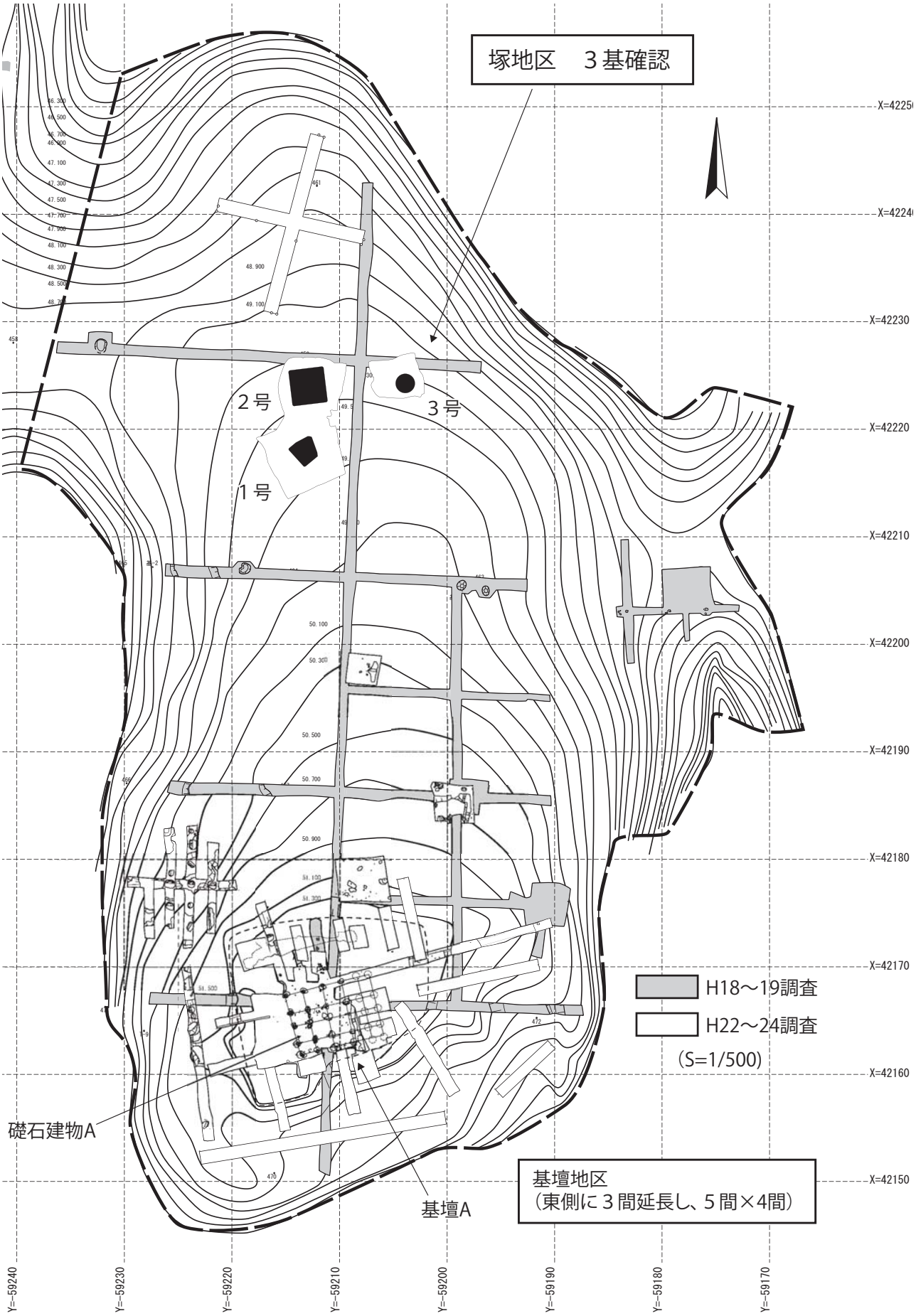
⑴　礎石建物 A（第 22 図）

今回調査の結果、建物規模は東側に 3 間延長し、5 間× 4 間、二面庇の総柱建物である。前回報告のとおり仏堂と考えられ、須弥壇は前回報告で指摘した位置、図中では、建物中央の柱間のせまいところに設えられた可能性がある。

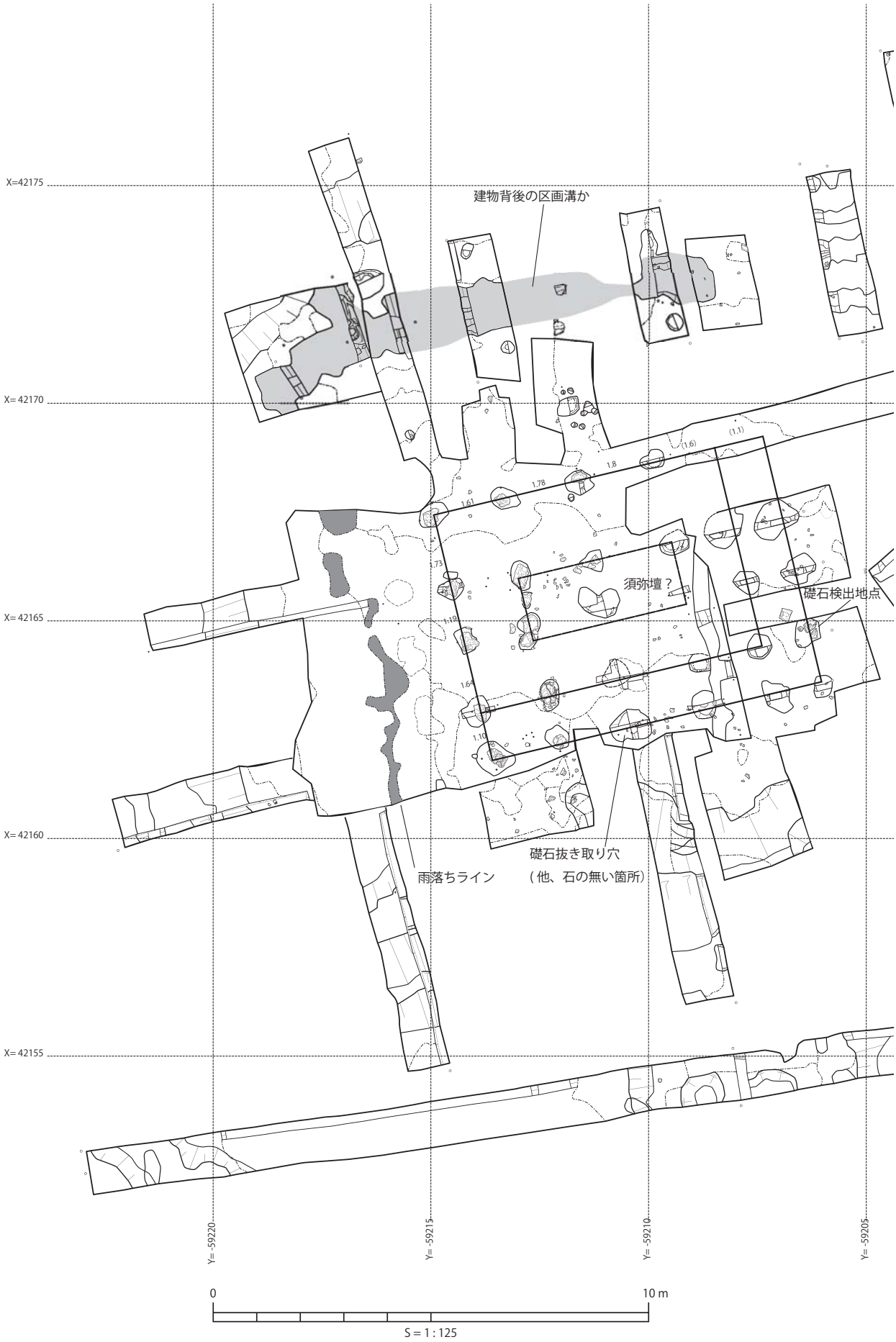
建物北面には区画溝らしき掘方も発見された。西面の帯状に延びる不整形なプランは、雨落ちの痕跡と思われる。

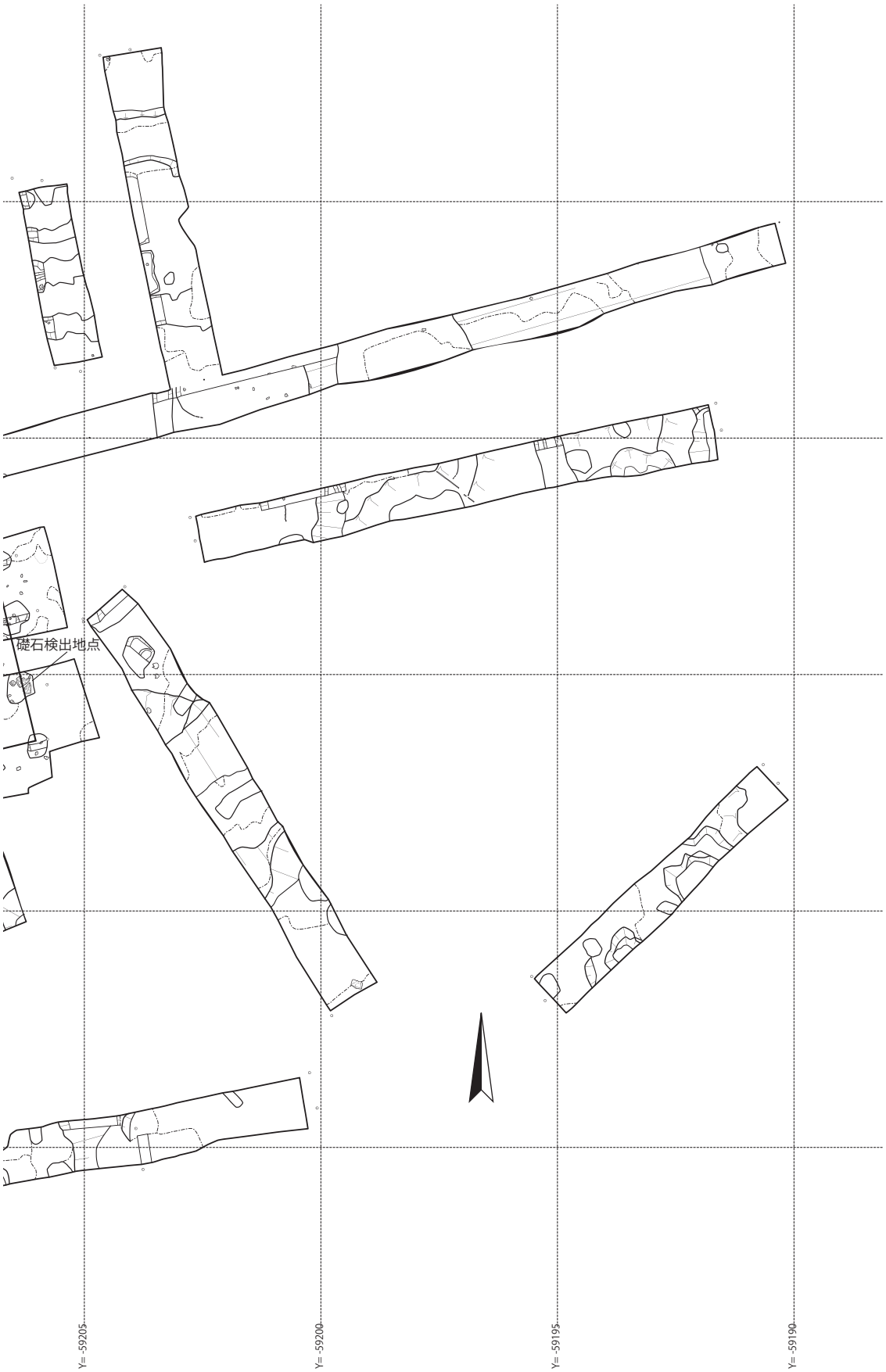
⑵　塚（第 23 ～ 24 図）

今回調査で発見された当初は「塚状遺構」と「集石遺構」という呼び方をしたが、調査の結果、すべて「塚」とした。

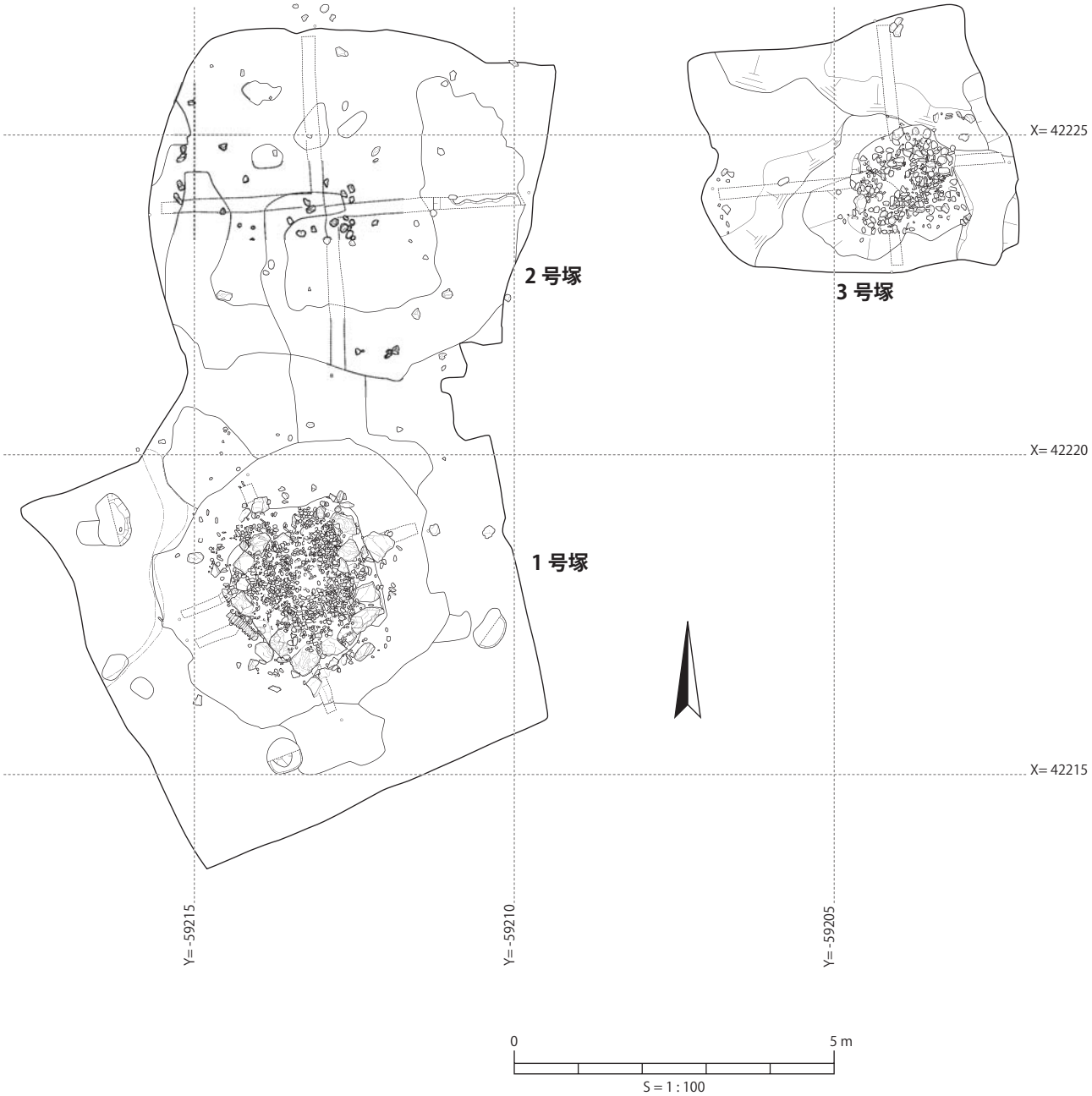


第 21 図　松谷廃寺跡　平坦面 A 平面図


X=42175
X=42170
X=42165
X=42160
X=42155
Y=-59220
Y=-59215
Y=-59210
Y=-59205
建物背後の区画溝か
須弥壇？
礎石検出地点
礎石抜き取り穴
（他、石の無い箇所）
雨落ちライン
(1.1)
(1.6)
1.8
1.78
1.61
1.73
1.19
1.64
1.10
0
10 m
S = 1 : 125



第 22 図　松谷廃寺跡　基壇地区 平面図

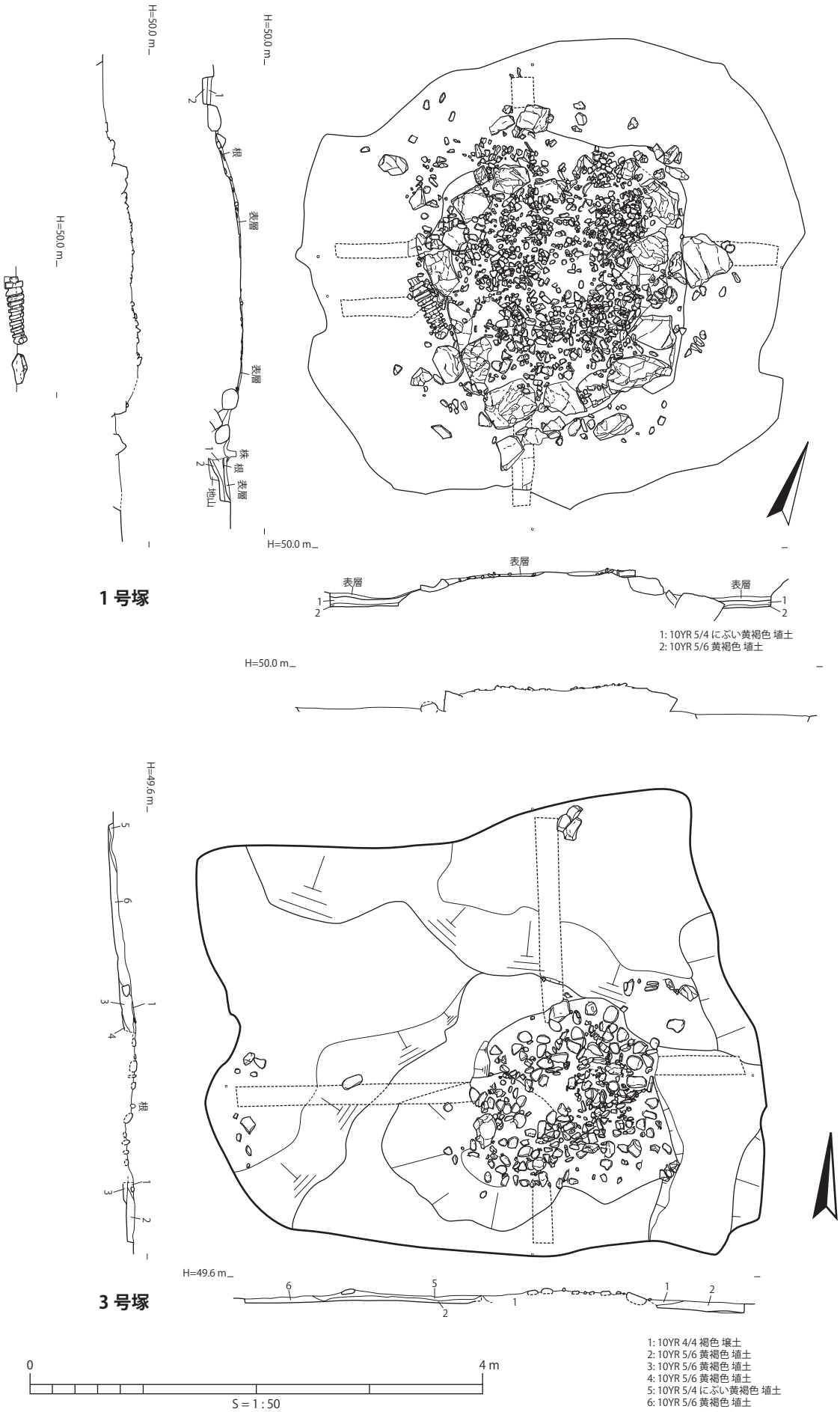


第 23 図　松谷寺跡　塚地区 平面図

塚は 3 基確認したが、2 号塚については、礫の分布は疎らで盛り上がりは確認できず、かろうじて略方形プランの内部に礫が散在しているのみで、保存状態が非常に悪い。

1 号塚は、崩れているものの大きな角礫を方形に組んで囲んでいることは看取でき、内部に円礫を敷き詰めるように充填している。あまり明瞭ではないが、塚の盛り上がりを強調するように、大きな角礫の周囲を囲むように掘り凹めてあり、これがプランとして見いだされる。西面の傍らには、上部から転落したと見られる相輪（第＊図 1）が出土した。

3 号塚は、円礫の集中は確認できるが、塚の盛り上がり、周囲を囲む角礫や周溝などは不明である。



第 24 図　松谷寺跡　遺構実測図

2　遺物（第 25 図）

今回調査で出土した遺物は僅かで、なおかつそのほとんどが細片であったために、実測図化して報告するのは 3 点である。

1 は相輪である。簡略化した作りで、宝珠と九輪のみで構成されている。あるいは、九輪の 8 段目は請花のようにも見える形をしている。1 号塚には他に石塔を構成したと思われる石造物は確認されていない。石材は、やや緑色を帯びた凝灰角礫岩である。

2 は須恵器、平瓶である。前回報告の再掲（市内遺跡報告 Ⅵ 65 頁 第 35 図 8）であり、今回調査で接合資料や同一個体片の追加があったことから再実測したものである。

3 も須恵器、坏 A である。前回報告の同器種とよく似ており、8 世紀第 2 四半期頃の所産と考えられる。

4 は土師器、浅型椀である。糸切り底で器壁が非常にうすい。前回報告の同器種とよく似ており、10 ～ 11 世紀代の所産と考えられる。

その他、確認調査の出土遺物ではないが、調査地平坦面の登り口付近で 5 の磨製石斧が採集された。定角式の磨製石斧で、石材は蛇紋岩、基部を欠損している。基部が幅広の特徴から、縄文時代中期ごろの所産と思われる。

第 4 節　小結

本報告は、平成 18 ～ 21 年度に中宮八院「松谷寺跡」として調査した平坦面 A と B のうちの A の成果に基づいて、古代山林寺院「松谷廃寺跡」として平成 22 ～ 24 年度に実施した補足調査分の報告である。

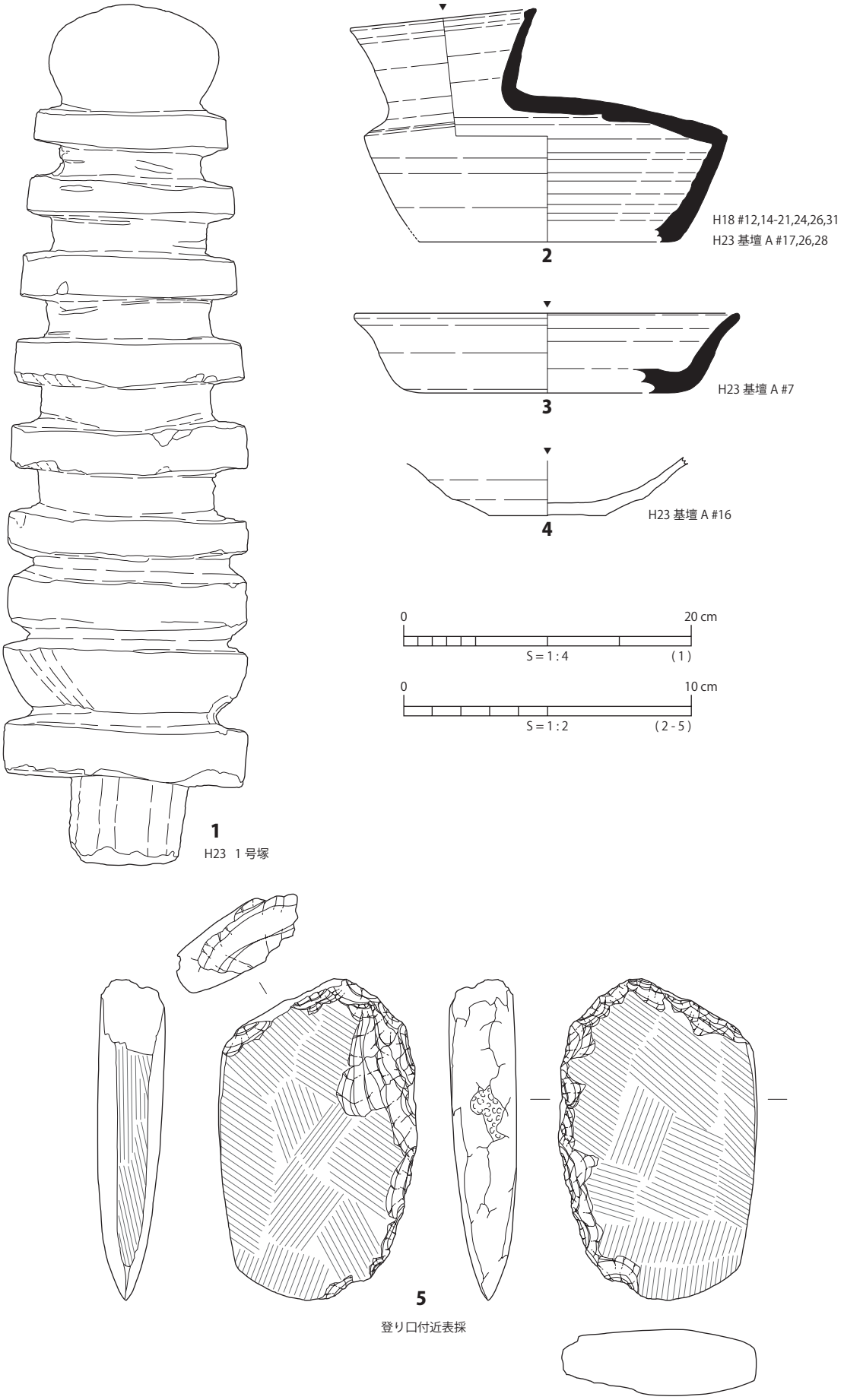
結果的には、当初の調査目的であった中宮八院の「松谷寺」の確認調査で奈良時代まで溯る古代山林寺院の遺構を発見し、これを「松谷廃寺」と呼び分けて追加調査をしたところ、「松谷寺」に関連する遺構を発見したことになる。これが 3 基の塚である。

これらの塚は内部にトレンチを入れていないが、1 号塚は、傍らで出土した相輪によって仏塔としての性格が示唆される。3 号塚も同様に内部の調査をしていないが、現時点で経塚と推定している。2 号塚については、最終的に塚 (状遺構) と認めるかどうかまで含めて再検討の余地を残している。

また、礎石建物については、今回調査で 5 間× 4 間と確認され、中央に須弥壇を備えた仏堂と考えて差し支えない規模となった。

参考文献

小松市教育委員会 2010 年『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』



第 25 図　松谷 (廃) 寺跡　出土遺物実測図

報 告 書 抄 録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 13
書　　名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII
副 書 名	矢田新遺跡・五郎座貝塚・松谷廃寺跡
巻　　次	
編・著者名	宮田 明・横幕 真
編 集 機 関	小松市埋蔵文化財センター
所 在 地	〒 923-0075　石川県小松市原町ト 77-8　TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2018 年 3 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
やたしん 矢田新	いしかわけん こまつし 石川県小松市 やたまち 矢田町	17203	03108	36° 20′ 28″	136° 24′ 38″	2013. 7. 9 ～ 2013. 7.26	63	個人住宅
				36° 20′ 28″	136° 24′ 38″	2013.10.17 ～ 2013.10.30	65	個人住宅
ごろうざ 五郎座	いしかわけん こまつし 石川県小松市 いまえまち 今江町	17203	03147	36° 22′ 28″	136° 26′ 49″	2013. 5.23 ～ 2013. 6.13	58	個人住宅
まつたにはいじ 松谷廃寺	いしかわけん こまつし 石川県小松市 ごこうじまち 五国寺町	17203	03283	36° 22′ 30″	136° 30′ 34″	2010. 5. 8 ～ 2010. 7. 5 2011. 8. 3 ～ 2011.11.28 2012. 7.23 ～ 2012.10.11	約 4,000	重要遺跡 詳細分布調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
やたしん 矢田新	集落跡	古　代	掘立柱建物 2 溝 4 土坑 7 不明遺構 3	土師器、須恵器、鍛冶滓、鉄製品	
要　約	掘立柱建物 2 棟と複数の溝・土坑を確認。土坑には硬化面や焼土が伴い、竪穴建物の掘り方土坑の可能性がある。				

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごろうざ 五郎座	集落跡	縄　文 弥　生 古　墳 中　世	土坑 2	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、珠洲、鍛冶滓	
要　約	土坑の掘削は古代以降か。調査範囲に貝塚はなかった。				

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
まつたにはいじ 松谷廃寺	寺院跡	古　代 中　世	礎石建物跡 1 塚 3	須恵器、土師器	縄文時代の 磨製石斧採集
要　約	礎石建物跡は、前回調査より東側に 3 間延長することが確認され、5 間× 4 間の仏堂跡と考えられる。新たに発見された塚 3 基は、中宮八院「松谷寺」関連遺構と考えられる。				

Ⅰ区　東側完掘（南から）

Ⅰ区　北側完掘（西から）

Ⅱ区　東側完掘（南から）

Ⅱ区　北側完掘（西から）

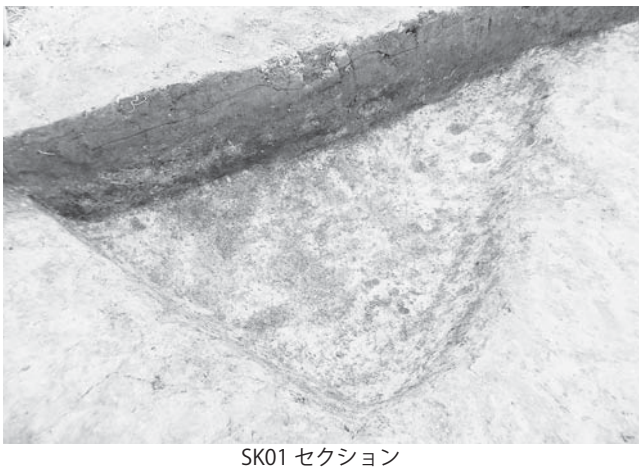
SB08 完掘（北から）

SB09 完掘（南から）

SX01 セクション

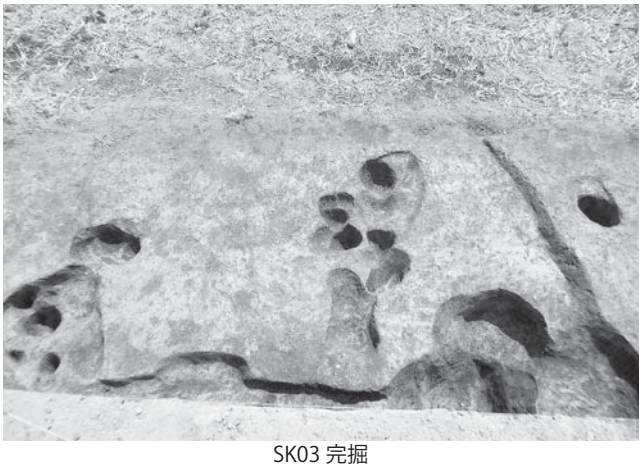
SD01 セクション

SD02 セクション



SK01 セクション

SK02 セクション


SK03 完掘

SK03 内掘削（焼土遺構検出面）

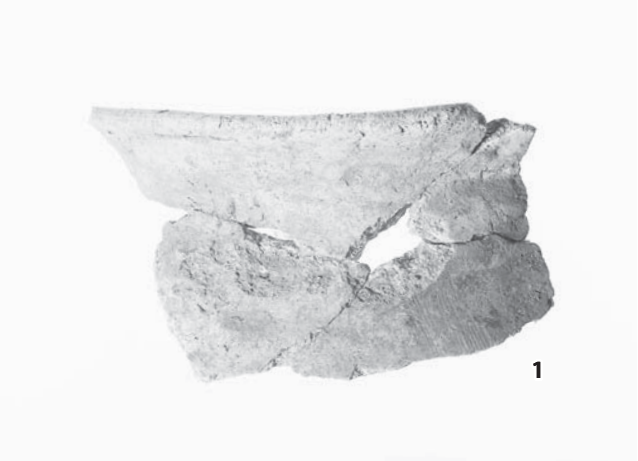
SK03 内焼土遺構セクション

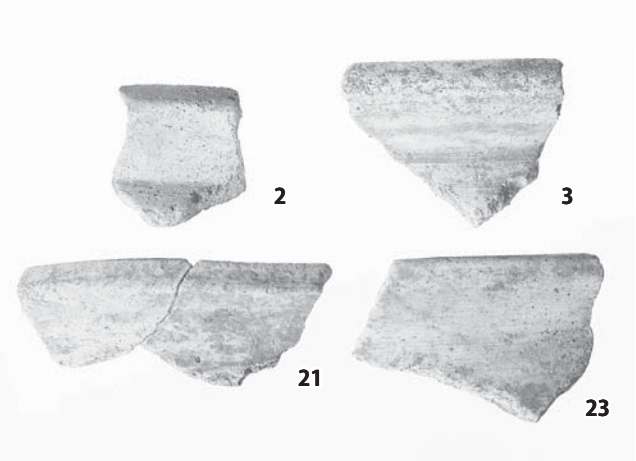
SK04 セクション

SK05 セクション

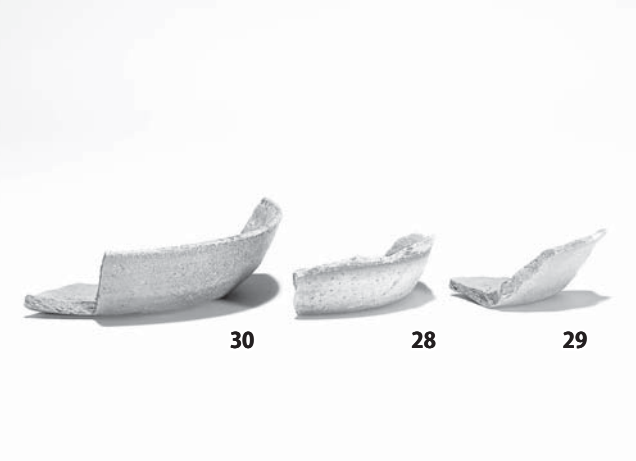
SK06・07 セクション

SK06・07 硬化面検出

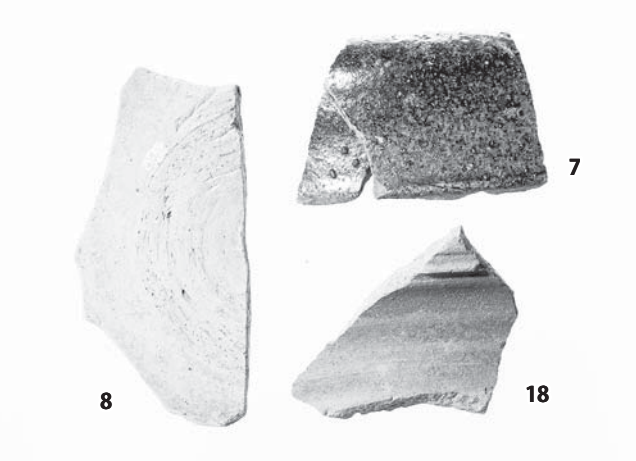

1

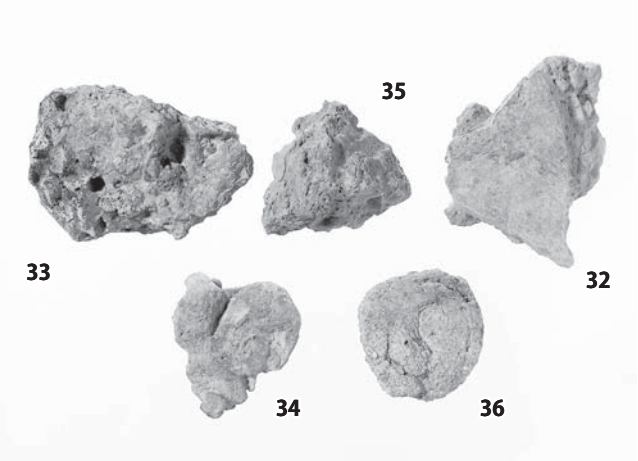

2
3
21
23

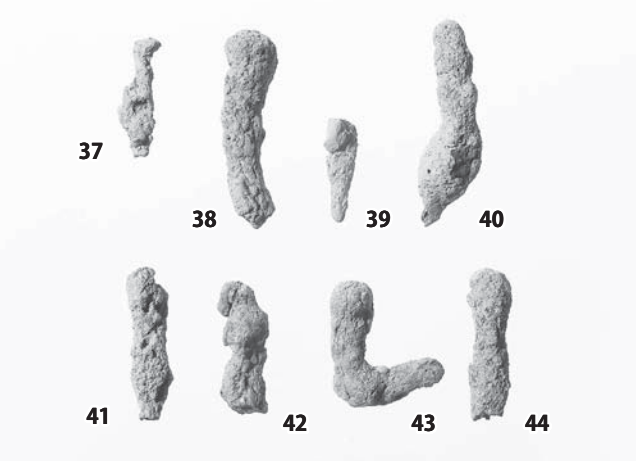
26


30
28
29

25
20


7
8
18


35
33
32
34
36


37
38
39
40
41
42
43
44

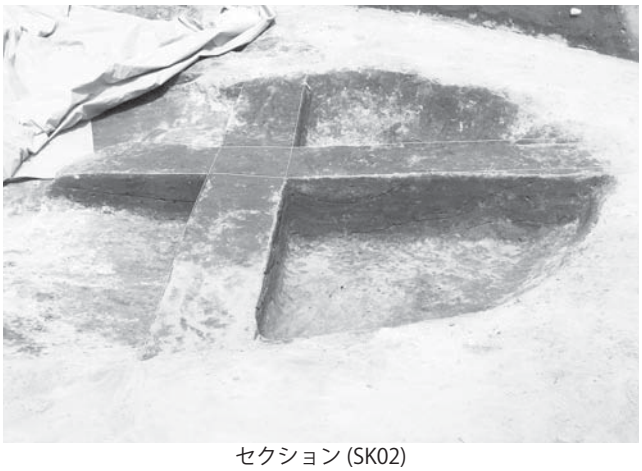
作業状況 (SK01)

作業状況 (SK02)

プラン確認 (SK01)

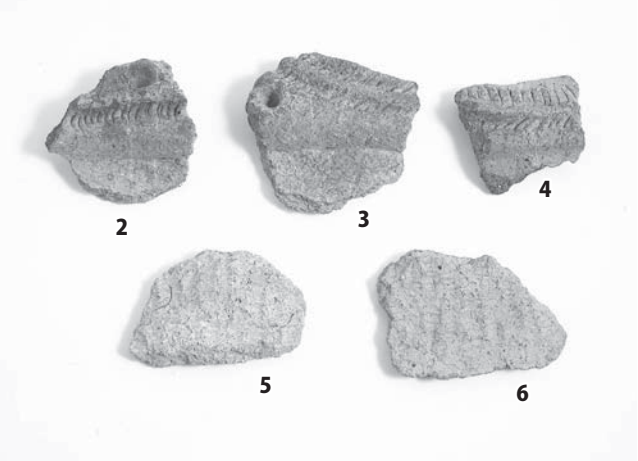
プラン確認 (SK02)

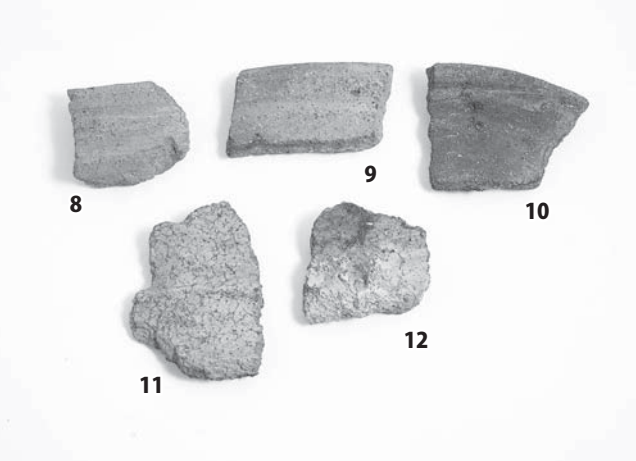
セクション (SK01)

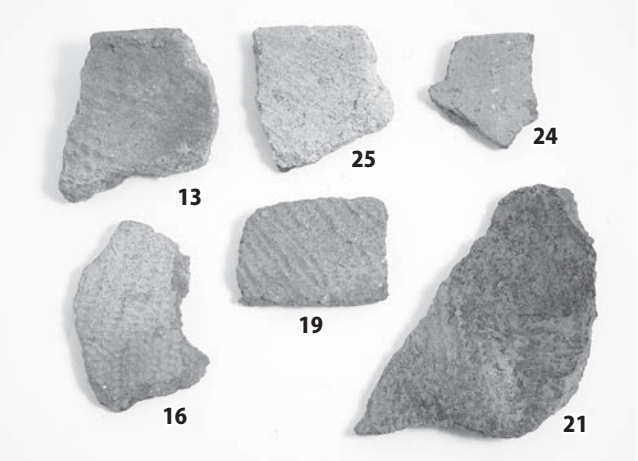

セクション (SK02)

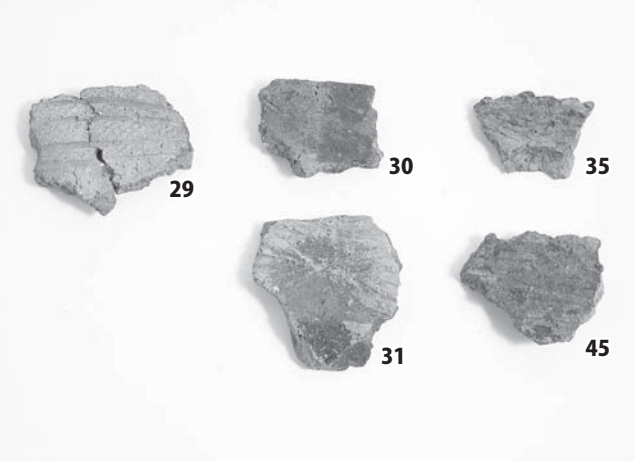
セクション (西壁)

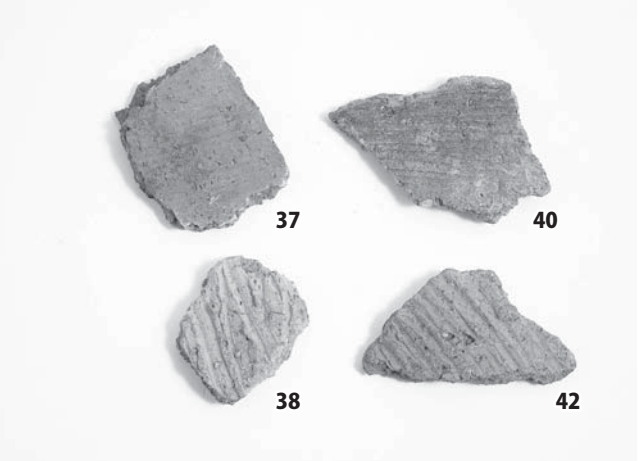
完掘状況

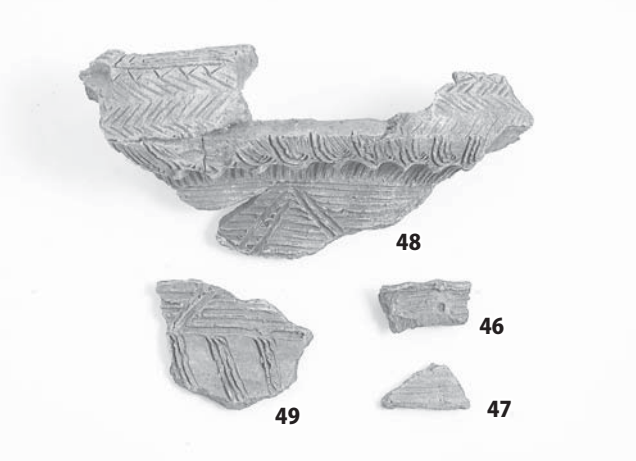

2
3
4
5
6


8
9
10
11
12

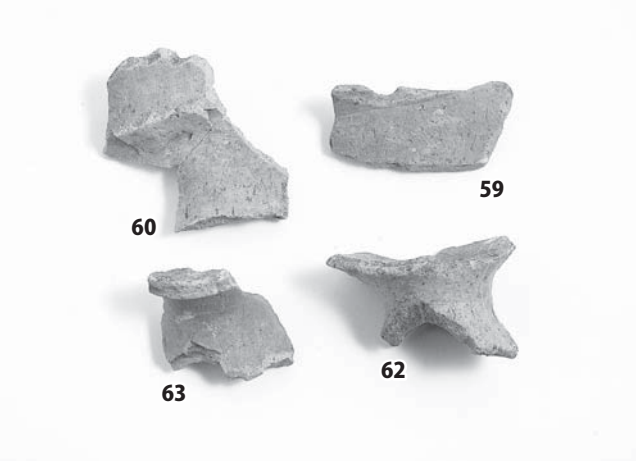

13
25
24
19
16
21


29
30
35
31
45

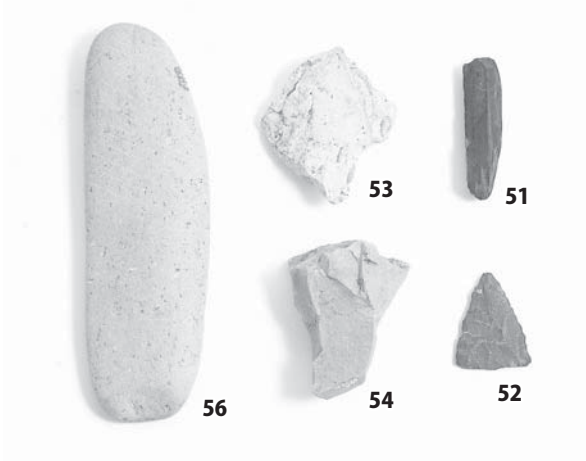

37
40
38
42

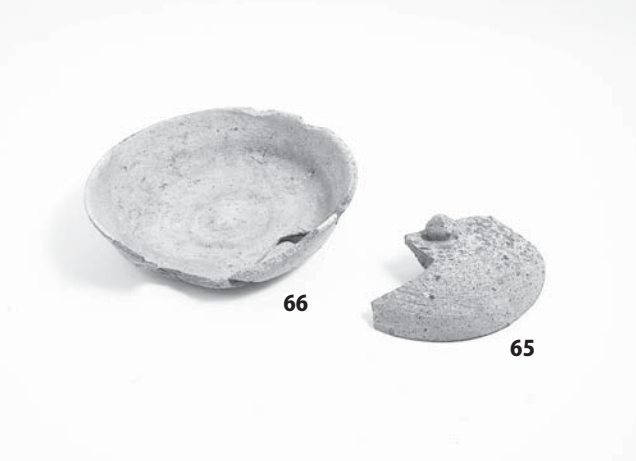

48
46
49
47

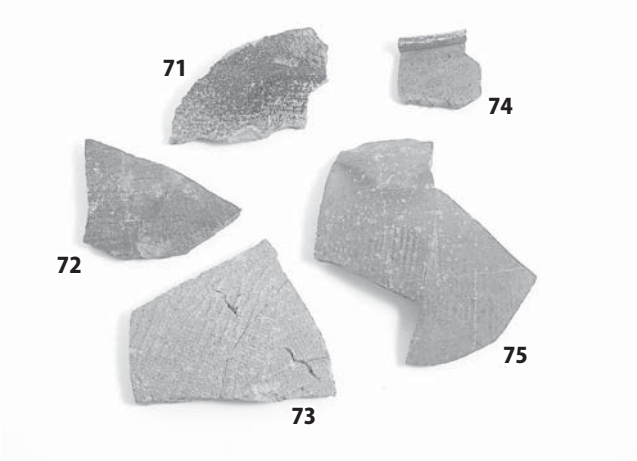
48

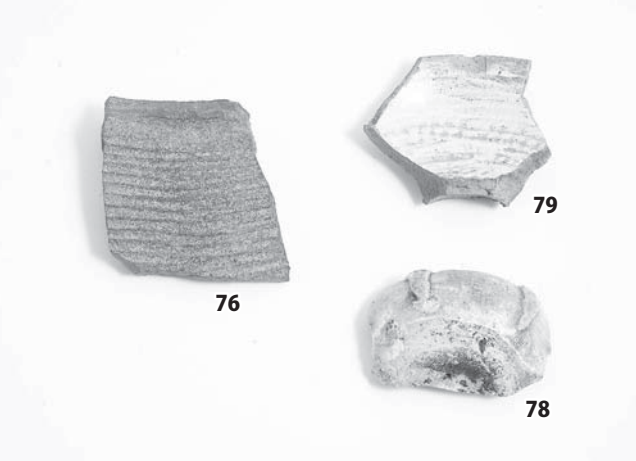

60
59
63
62

57
55
58

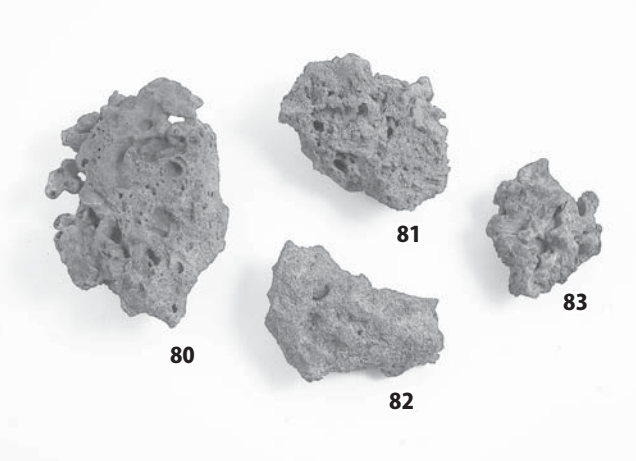

53
51
56
54
52

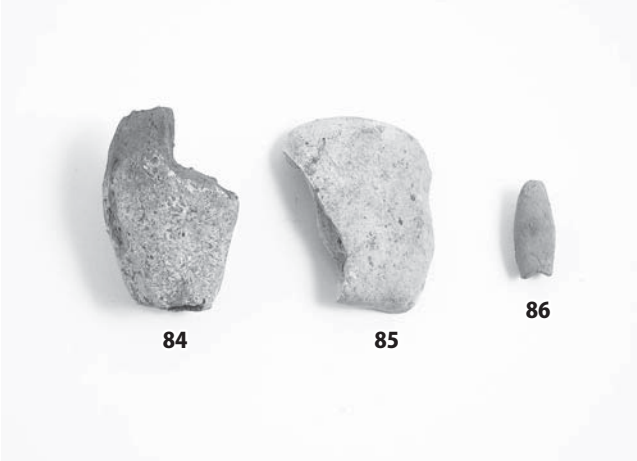

66
65

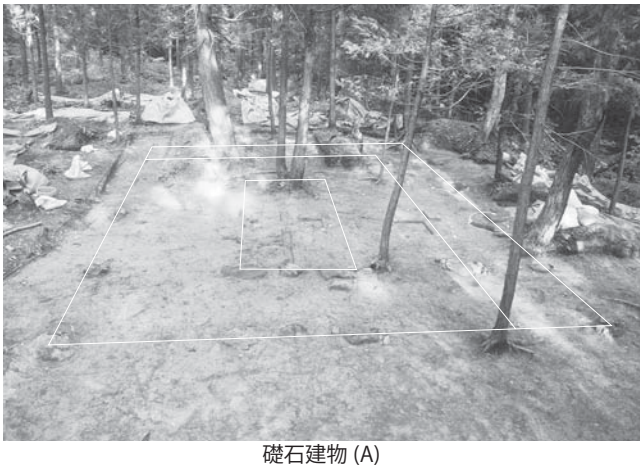

71
74
72
75
73


79
76
78

77


81
83
80
82

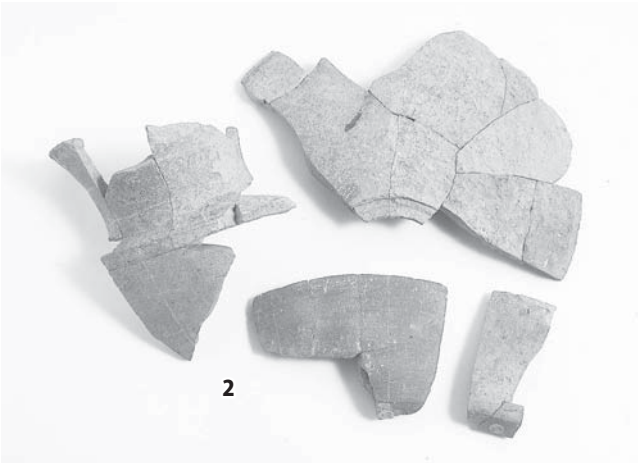

86
84
85


礎石建物 (A)

1 号塚

2 号塚

3 号塚



小松市内遺跡発掘調査報告書 XIII

矢田新遺跡・五郎座貝塚・松谷廃寺跡

平成 30 年 3 月 30 日　発行

編集・発行　小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8　TEL (0761) 47-5713

印　　刷　株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32　TEL (0761) 22-7031